
俺の哀れで滑稽な楽しい日々

熊取

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の哀れで滑稽な楽しい日々

【Nコード】

N6746D

【作者名】

熊取

【あらすじ】

この話しはとっても寂しがり屋な少年の誰かの心において続けようとした滑稽な物語

僕の心の溝の出来上がり（前書き）

この小説の彼とは清涼高校で新しい部活を立ち上げる人物です。

僕の心の溝の出来上がり

僕は異端、この世の異端、この世の摂理から外れた孤独で孤高の間。

僕はようちえんのころから、いや、もっと前からだったと思う。とり分け聞き分けが良かった。

ゆえに周りの子たちと同じようではなかった。

他の子たちがとくさつせんたいもののアニメでかたりかけてくる新の正義なる物にはまっている時、僕はせいじかやぎいん、テレビのゲストがときおりかたるうその正義にきょうみをそそられた。

みんながすな場やゆうぐであそんでいる時、一人で本を読みながらそれをながめているのが好きだった。

僕は一人がきらいじゃなかった。

でも、いやじゃないけど好きなわけでもない。

けれど、あまり僕の周りに人はいなかった。

いつも母さんがいたただけだ。

僕の父さんは自分のしゅぎはしんでもつらぬくといった頭のかたい人げんだった。

昔から、どれだけ昔からかしらなかったけど、父さんは自分のせいぎという物をまげるのは見たことがなかった。

ゆえに、異端だった。

母さんは、かなりのひねくれ者でひきょうな人げんだった。

それに、さみしがり屋でもあった。
かなりのひねくれ者でランキングでもあればせかいで100位い
いには入れるんじゃないかってぐらいひねくれている。いつもかなり
つつぱっていた。

ゆえに、異端だった。

だが、父はいそがしい人だった。
なにせ動くはんいがせかいたんだったからだ。

そして、いつも母さんはかわいがり方というのがよく分からなかつ
たから、いつも僕をいじってあそんでいた。

そうして9歳になった。

だが、彼の9年はあまつさえ長かった。

この時、彼は人生のターニングポイントを迎えることになった。
普通の日本人なら20を過ぎたころに迎える転機を、まだ二桁にも
満たない歳にも関わらず、である。

この時、彼は学校では完全に浮いた存在になっていて、遂にずっと
話しかけてくれていた子も離れて行った。彼が怖くなったのだ。

いつも顔には冷淡な微笑みを浮かべ、自分たちとは別次元の考えを
持っている……彼が。

でも、彼にはまだ両親が居たのだ。

この存在は彼にとっては最後の綱だった。

それは嵐の日の海に浮かぶ船の様な彼の心を地球に繋ぎ止めて置け

る唯一の物だった。

でも、その綱はもう長い事繋がれていたみたいで随分脆くなっていた。

彼から友という存在がなくなったこの日遂に彼は両親から離れてしまった。

自分の父の主義と真つ向から戦い、母のひねくれから卑怯に攻め、二人を………飲み込んだ。

その瞬間彼はこの世の唯一の支えを失くした。

そして、異端の中でさへ異端になった。

外れ者の中の外れ者。

世界から、弾きだされてしまった。

今まではなんだかんだと言っても人が嫌いではなかったのだが、この時ばかりは憎まずにはいられなかったみたいだった。

人でなく……この世を…。

この話しは彼がこの世を憎み始めてから、高校生になって新しい部活を立ち上げるまでの物語である。

名凸凹コンビ誕生！！

俺は家を出ようと思ったが、今はまだ所詮経済力のない自分の過ちすら自分で対処できない唯の9歳児。だから、少し我慢することにした。

…一人で生きて行けるまで。

そして、1年が過ぎ10歳の誕生日を控えた日に俺は家を出た。

当てはあるようなない様な感じだった……。

だが、一年間死ぬ気で自分を鍛え、経済の勉強もやったし、今まで自分の小遣いなど使った事もなかったので金銭面でも多少は余裕がある。

なにより、この一年間でもっとこの世を嫌いになった。

この時は本気で生きていけるという確信があった。それが迷信等とは気づけずに。

この後、俺の親はかなりの大騒ぎを起こしたらしい。

もちろんそのような事は俺が去った後の事なので、知るよしも無かったが…。

だけど、この世はそんなに甘くは無かったということか。

もうどれだけの時間が経ったのだろう。

僕はもう自分がどこにいるのかも分からなかった。

外国のどこかの国を放浪していて、遂に金も尽きようとしていた。

俺は日の当たらない暗い所で座っていて、動く気力ももう無かった。

そんな時にアイツは現れた。

『お前、こんなところで死ぬのかよ。』

そいつはいきなり俺にこんな質問を投げかけて来た。

俺はもうどうしようも無い位ボロボロだったが、皮肉にも捻くれ者も母の血を引き継いでいるので、笑顔を作って答えてやった。

『ハハハッ、そんな訳ないだろ。結構日陰で休んでただけだよ。

……俺にはやらなきゃいけない大事があるんだから。死に場所は……こんなところじゃない。そうだねこんなところじゃない。』

まさか声を掛けたやつも自分より何cmも背の低い子供がこんなことを直ぐに言い切るとは思ってたらしくこの言葉も大変気に入って、そして言った。

『上出来、それに合格。さっきパツと見たただったんだけど唯者じゃないとは思って声を掛けたらこれだよ。よしっ、お前は俺と一緒に組織に入って働こう。うん、そうしよう。ちなみにお前に拒否する権利なんてないぞ。俺が直々に決めたんだからな。……俺の名は日本では光輝だ。輝いてるだろ……。宜しくな、俺のパートナー。』

そう言っ、アイツは俺に握手を求めて来た。

この時俺は何が何でも生きなければならなかったので、……あいつの、

光輝の手を掴んだ。

こうして、明と言う名をもつ大人っぽい少年と光と言う名を持つ少し子供っぽい青年というこの世を少し騒がせる事になる名凸凹コンビがここに誕生した。

俺の名前は【ジョーカー】

俺がアイツと出合った時には既に家を出てから1ヶ月以上が経っていたらしい。

だが、その時間に十分見合うほどの対価は得られた。

資金源を得たのだ。

こいつの誘いに乗ったのは死なない様にするためで、訳のわからん事に力を貸す気なんて毛頭なかったのだが、組織の概要を聞いてその態度を150度程改めた。

組織名は【エピゴノイ】ネーミングセンスの無い名前だな、と言ったらアイツは御免と言ったので多分この名前を付けたのはアイツだろう。

ちなみに意味は「後継者」らしく何のだと問うたらポストモダンのと返された。

まず、この組織は結構様々な事業に手を出していて、その結果は全てを平均すると利益が出るといった成功しているのか失敗しているのか分からないような現状だった。

あと、もう一つ組織の人も含めて他に知っている者は世界でも数十人位らしい別の活動もあった。

それは戦争だった。

戦争とは言っても目立たないようにやっていて、仕掛けられた国も他の国に知られるのは得策ではなく、内争として処理をしている。

この組織の戦績は7割位の黒星らしい。

ちなみに組織は国連加盟などしていないが、一つの独立した国となっている。

テロ集団の総称を【クライシス】（危機）と呼んでいて、捻りがな
いと言ったら今度は顔を伏せてしまった。

経済組織の方は米国や英国や日本まで結構な数の支部が存在しているのだが、クライシスの方は基本は本部にいて用事がある時のみ離れるらしい。

クライシスは大きく分けて戦闘部隊と頭脳部隊があり当然戦闘部隊の方が圧倒的な数がある、とは言ってもこのクライシスの方は基本的に他国からの引き抜きにより成り立っているのですこまで大した数が存在している訳ではない。

そして、俺の自称相方は戦闘部隊の原則上から隊長、副隊長、隊長補佐、副隊長補佐此処までは1名ずつ部隊長4名、その下に各部隊9名ずつの空き有りの内の隊長という地位に経っているという信じがたい事を言ってきた。

なんせ、こいつはまだ若干17歳だったからだ。

他の人の年齢も随分若いらしいのだが、こいつの年はその中でも2番目である。

これもこいつが考えたらしいが、何か別名が欲しくて一晩考えた所
ランプを思いついて隊長格はジャック、部隊長が順にスピードの
10から4つ、その下は強い順に並ぶと言う事を思いつきそれを
みんなに提案すると思いのほか呼びやすく、採用され皆からはジャ
ックとも呼ばれているそうだ。

これを決める時ハートになった人はいきなり反対し始めたらしい。

頭脳部隊にもこの呼び方が流行り、キングとクイーンの名前を貰ったこの時ちょうど人数が8名だった。

しかし、男子は5名でこちらの方が不名誉な称号となった。

そして、俺の配属について問うとあいっはかなり突拍子もない事をした。まった。

「ああ、お前はトップだ。これから最近では違う方向に進みだした2つの部隊を纏めてもらう。

これからお前は

【ジョーカー】だ。

……お前には期待してるぜ。」

此処からこの物語は少しずつ始まっていく。

俺の賛否両論

「……………お前、…何だって？」

俺はジョーカー？

そこはあまり問題じゃないが、トップ？

つまり一番偉い存在ってことか。

嘘だろ、別に気に入らないとかじゃないけど。……俺はまだ年齢が二桁になったばかりの真正銘ただかなり変わってるだけの生意気なガキだぞ。

「だから、お前が俺らを纏めるの、安心しろ。幾等他の奴がお前のことを嫌ってもお前が命令すれば皆嫌々ながらも従ってくれる。」
「やっぱり俺がトップなのか。それに皆って……………」

そうか、コイツがいくらいきがっても皆が反対すれば、

「それはもう皆と話し合って決まった事なのか？」

そつだよ、こんな糞餓鬼がいくら騒いだところで、

「ああ、戦闘部隊はまず俺が言うならって事で全員従ってくれたぜ。
一応俺のクラスはジャックだからな。

だけど、頭脳部隊を説得するのに困ったな。

俺はあいつ等にあまり好かれてなかったから。けど、1年経って使えないようなら捨てるって事で承してくれた。だから、一年以内にちゃんと出来るようにしてくれよな。」

話しがちと出来すぎな気がするんだが、

「何でお前そこまで俺に期待してんだ。少し可笑しいだろ。どつかであったことでもあるのか？」

すると、やつは笑いだした。

「フフフツ……勘弁な行き成り笑ったりして。お前が俺の想像通りに鋭いもんだから思わず笑っちまった。えーっと、……そうだ、お前にどつかで会ったかってことだよな。あるぜ、と言うかずっと見てた。いつからだっけかな。もうかれこれ2、3年位たつと思うけどな。一目みてピーンときて、暇になったら偶に来てたんだ。でも、3日前にお前が死にかけてるのを見た時は吃驚したな。何せお前俺らが敵戦地から帰る途中の場所にくだばってるんだもんな。そのくせあの態度だろ。戦闘部隊が納得したのは俺が前からお前の事を話してた部分が大いんだ。だからあいつ等は納得して頭脳連中は反対したんだよ。」

そうか、そうだったのか。

それに、俺はどんなとこにいたんだよ。

あの時はもうかなり意識が朦朧としてたからな……3日？こいつ確かに3日って言ったよな。

「おい、俺は3日も寝てたのか？」

「お前にしては少し反応遅かったな。ああ、確かに寝てたよ。あのあとお前が気絶してからずーっと、それこそ嘘見てーに眠ってたな。だけどお前もタイミングよく起きるよな。お前の待遇が決まって俺がお前の様子を見にきて物の数分で目覚めたんだぞ。」

まじで眠ってたのか。それにここ何処だよ。ずっと眠ってたから分からないんだが。

「ここは地球のどこら辺に位置してるんだ。」

「確か………ヨーロッパ？……すまん他の人に聞いてくれ。俺、

教養あまりなくて。」

どこまで馬鹿なんだよこいつは。

ホントに何十って部下を抱えてんのか？

はあっ、こいつの話しをどこまで信用していいのか知らねえが、

…今は時間を無駄にしてる場合じゃあないよな。

「俺はお前をこれから何と呼べばいい。」

「何でもいいよん。」

「そうか、分かった光輝。」

じゃあ俺の事は今度からはジョーカーと呼べ。

この名前、思いのほか気にいった。

そんで今はこんなところでいつまでもしゃべってる場合じゃあ無い。

早いとこ出来るようにならなきゃなんねえからな、そうしなきゃ俺は捨てられる。

取り合えず8ヶ月もあればマスターしてやるさ。」

「お前普通はそこで半年とかにしないか？」

「人間の一度に詰め込める知識量を過小評価するな。」

そう言っただけはかなり高級そうなベッドから起きて立ち上がると無言でクローゼットを開けて中から俺にぴったり合いそうなサイズのスーツを取り出して着替えた。

そして、この西洋風の高級の部屋からドアを開けて一歩外に出て、光輝も出てからドアを閉めた。

につこりと笑って指示をだす。

「取り合えずキングから10までの全員にあってみたいんだが、ダメか？」

「うーん、取り合えず今の所は戦闘部隊で会えるのは俺の部下の10だけだぞ。頭脳部隊は多分5名にはあえると思うけど、皆変わりもんだぜ。

ま、それは全員に言えることだけだな。」

それだけ会えれば今のとこ十分だ。

あまり一辺にあっても頭がこんがりそうだからな。

「じゃあ、そこに案内してくれ。光輝。」

「へい、了解。」

ハハハッ、これからは忙しくなりそうだな。

俺の初勝利（前書き）

俺の初勝利

まず、俺は10に会うことにした。

10の居る場所はさっきまで俺が気絶していた洋館とは別の訓練場なるところでいつも鍛錬を積んでいるらしいのでそこに向かって歩いて来て、今その訓練場に足を踏み入れたところである。

中に入ると二人の男がバトルをしていた。

と言うより一人の30代後半に見えるがっしりとした黒人の男が10代ぐらいの白人の青年で遊んでいる様な感じだった。

「光輝、あの二人は誰だ。階級と名前と年齢を教えてくれ。」

光輝は順に指を指しながら答えた。

「余裕で相手の攻撃をかわしている方がクローバーの10のアレクで確か年は30後半ぐらいだったと思うけど良く覚えてない。で、必死にずっと攻撃を繰り返している方が3日前までここの最年少だった14歳のエディでまだあいつは入って半年も経ってないから弱くて階級は2だぞ。」

あれで2番目の弱さなのかよ。

本当にこいつら人間か？

目の前の光景はさしもの少年も驚いた。

少年から見たら二人の動きは普通の人間のそれとは思えない物で、2ランクと呼ばれる少年の攻撃でさえボクシングの大会になぞでれ

ば、前ラウンド一撃K.O.ができそうに見える。

「あいつら人間なのかよ。」

こんな言葉が漏れて出た。

すると、あいつはハハツと笑って答えた。

「一般人からみたらそう見えるらしいな。けどそう言ってるやつも何年かすればあの位は動ける様になったぞ。」

もう人間のそれじゃないね、あいつ等は。

何時までも見てる暇は無いな。

「おい！！少し止めてくれ！！」

すると、二人は直ぐに止めて20メートル程の距離があつたにも関わらず一瞬で間を詰めて来た。

「今日は挨拶に來ただけだ。…俺の事はこれからジョーカーと呼ぶように、お前達の紹介は要らないから。これからよろしく頼むよ。」

アレクと言うおっさんの方は分かりましたと素直に答えたがエディの方は何か気に入らない様子で口を尖らせて厭味を呟いた。

「……ふん、こんな俺より弱そうな餓鬼が…何で全く…」

当然この言葉は全員に聞こえて、アレクのおっさんは良い顔はしてなかった。

少し間違いがあるね。弱そうじゃなくて、弱いだ。強さで競ったら絶対に俺は勝てない自信があるね。

「クツクツクツ、俺を歓迎してくれない奴もいるみたいだな。別に良いんだけどな、どんな反応してくれても俺一人ではお前を此処から叩き出す権限なんてないし、皆が納得してくれるとも思えん。ましてや説得なんてしてる間に俺が叩き出されても洒落にならんからな。」

「何だと。」

エディが案の定噛み付いて来て今までより一層笑顔になる。

「シシシッ、俺の言いたい事が伝わらなかったか？じゃあお前の頭でも分かるように端的に言い換えてやるよ。……俺はお前が嫌いだ。」

その瞬間に襲いかかろうとしたが、アレクに服をがっしりと持たれているのでそれは出来なかった。

「このままだとお前にも俺にも不満が残るだろ。……そこでだ、どっちが強いかはつきりと決めよう。この戦いにルールを求めちゃいけないよ。それじゃ、お前のタイミングで始めよう。」

直ぐには襲いかからなかったが、アレクの力が微妙に少し、一瞬緩んだ隙を図って腕を弾いて、次に相手の方を見ると彼は笑っていた。このどう考えても自分が不利だという状況で彼はずっと笑っている。

「まあ少しだけ待てよ。名前ぐらい教えてくれ。」

この言葉を聞いて少しエディは拍子抜けしたみたいだったが、名前ぐらいならと思って1メートルぐらい前で立ち止まった。…これが罠だとも知らずに。

「そういえばまだ言っていなかったな。よく聞いとけ俺はなあ、グフォッ！！。」

この喋るのに気を取られる瞬間を彼は狙っていた。

誰でも心の奥底で意識しなくても自然に喋る言葉を自分の中で整理してから大抵の場合話す。

その一つの間隙を付いて彼はいくら超人といえども鍛えることは出来ていないであろう急所を狙って蹴りを全力で喰らわした。

この行動にはその場にいた一人を除く全員（他にも修行している人がいて、この戦いを見ようと休憩を取って見ていた人もいる）が言葉も出ないほど呆気にとられ、その中の半数以上が自分の物も触りながらエディに同情を寄せた。

エディは何か言いたそうだが、うまく呂律が回らなくなっているのだが、どうやら言いたい事は伝わっているようである。

「ケケケツ、卑怯だつて。別に俺はルールを破っちゃいないぜ。攻撃した場所はどうかつて、そんなものは知らん。俺は言っただろ。これは戦いだ、つて。そりゃあ試合であんなところを攻撃しようとは思ってもやらんが、これは生憎そうじゃない。喧嘩と一緒に、勝つ事それが前提でなんのルールもない。いや、一つだけあったけどそれも俺はちゃんと守った。……こんなことも分らないのかよ、それはお前のタイミングで始まる事だ。だからお前には俺に勝つチャンスが存在していたんだ。それにも関わらずお前は今無様にもそこでのた打ち回っている。」

お前は俺の倍以上の身体能力が備わっているにも関わらずにお前はそれをミクロン程も使いこなせてはいない。年下相手になら勝てると思っただか？残念だったな。これで分かったか？自覚したか？お前

は俺より弱いんだよ。

でも、今回の戦いでお前はかなりの代償と共にまた少しこの世を知れて成長したことだろう。これから精進してくれ。じゃあ、俺は次があるから、いくぞ光輝。」

そして、まだまだエディは納得していない様子だったが、そんなことは気持ちの端に掛かってても全く無視して次の目的地に歩いて去って行った。

「……………フフフツ、気にいっちゃった。」

この後、彼は一度寒気を感じて身震いしたらしい。

皆さんその後はどうですか？（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

皆さんその後はどうですか？

「ここだぞ。」

「そうか、……ってふざけるなよお前。ここに来るまで何分掛かってるんだ。」

あれか、この距離間はもしかして内部で2つに分かれてる頭脳と戦闘の距離をそのまま表してるからじゃねえだろうな。だとしたら本当にヤバイな。どれだけ距離離れてるんだよ。」

ホントにヤバイな俺。一年後に此处に居ないかも知れねえ。

「オーライト、あつたりー。いやー昔めっちゃ言い合いたことあったな。それから場所はなしやがってな。今じゃ、目的だけ共有してるだけで別の組織なんだよね。」

やっぱりか。んっん……はあ、ここまではね。

取り合えず会ってみるか。

謎の研究所の中はまず最初に無駄に画面がでかいパソコンが一台あり、そのキーボードをすごい速さで叩いている男がいるので、取り合えず後ろまで行つて様子を見ることにした。

「…………クラッカーか。」

俺がぼそつと呟いただけなのに凄い勢いで椅子を回転させてこちらを見てきた。

「君、分かるのかい？」

初めて正面から見たが、凄いな。特にもっさもさの髪が。これは後で奇麗に切ってもらおう。

「ええまあ。俺の師に【ブレイクキング】とか少し恥ずかしい称号の人がいてその人に無理やり教えられましたから。それと俺の事はジョーカーと呼べ。」

【ブレイクキング】とは世界でも1、2を争うほどの凄腕クラッカーの一人でその道の専門家で知らない人はいないという程有名なのだが、当然その道でない人は知らないで彼は有名人だとは全く知らなかった。

「あの御方の……へえそうか、君がジョーカーか。僕は全然従う気なんてなかったんだけどね。うん、君になら僕の力を使ってもいいよ。」

僕は世界ランク6位のディックだよ。ちなみにダイヤの13だよ。君には聞きたい事がいくつもあるんだけど、忙しいみたいだからまた今度にするよ。ここでは僕の話が伝わる相手がいなかったから君が来てくれてよかったよ。」

「ああ、今度は少し技術を教えてくれ。」

世界ランク6位か。あいつは使える。とうかさっきの戦闘部隊の動きの時も思ったが、ここにはちゃんと人材はそろってる。ちゃんと使ってやれる奴が居ない気はするけどな。

ま、えてして達人は皆変人つてのが定説だから纏めるのが難しいんだとは思っけど。

今度は……銃とか弄ってるから武器工か。しかも後ろの棚に半端じゃない程銃が置いてあるもんな。

で、その隣の方は……おいおい、あれって洗濯機だよな。見間違いないよな。え、なんでこんな変人たちの中で、まあ洗濯機作れるのは普通じゃないけどなんでありふれたもん作ってるんだ。あ、そうか。あの洗濯機にはすさまじい機能が…

「ちなみにあの洗濯機はいたって普通の機能しかないぞ。」

まじでかよ。あと、お前読心術でも使えるのか？
それはないな。恐らく俺が動揺したせいだろう。

落ち着け。こんなことで動揺していたら何が起きるか分からんぞ。

……よし、落ち着いた。

「マカロフ……いや、トカレフの方かな安全装置がないからな。でもこれを戦場で使えないだろ。誰かの護身用にでもするのか？」

今度はこっちを振り返ってさらに握手をされた。

あ、今度は女の子だ。なかなか可愛くてしかもちっちゃいな。俺よりちっちゃいじゃねえか。

「やっと話しの分かる人が現れてくれました。」
また個性あるひとだな。

それに銃の会話が出来ないって戦闘部隊の人大丈夫か？
あー、頭痛くなってきた。

「俺はジョーカーって呼んで。で、そちらの人とお前は。」
もう自己紹介飽きた。

それにアレクさんは覚えてるんだけどもう一人誰だったっけ？

「私はスミスって呼んでね。こっちは皆ハートの12だから心って呼ばれてる。」

それに心は片腕だけ上げて答えた。

「名前まで銃か。お前どれだけ好きなんだ？」

「お前さっきの事といいなんでそんなこと知ってたんだ？」

光輝が少し不審な目で見て来た。何度か彼に会いに来ていたとは言ってもこの様な一面を目にしたことはなかったからだ。

この一年間碌な人に出会わなかったからだ。

「そんな事はどうでもいいだろ。もう一様の挨拶は済んだんだ。さつさと次行くぞ。」

光輝はその後もずっとブツブツ言っていたので、黙らせてやりたかったが、ことごとく失敗したので諦めた。

絶対いつか武断政治してやる。

次に辿り着いたのは今までで一番怪しさ満天の部屋だった。

「……ここは何なんだ？」

「ここはな、ドカン！！ 科学研究室みたいなものだ。」

目の前のぐつい扉の中がどういうことになっているのかは分からないが、扉の端からは煙が漏れ出していて、中からはボコボコッ、やドカンという爆発音などが聞こえてくる。

「この中は安全なのか？」

まず酸素量ちゃんと21パーセントあるのか？
ガスマスクとかいるんじゃないのか？

「よしっ、お前が先にこの中に入れ。上司の命令だ。」

「いやー、この中はいつたらヤバいと思うんだけど。流石に俺が幾ら馬鹿でもそれ位は分かるぞ。まず此処は日ごろから誰も近づかないことで「いいから入れ。」」

俺はこのままでは埒があかないと思ったので、扉を開けると光輝を放り込み急いで扉を閉めた。

10秒位はずっと扉を叩いたり蹴ったりしている音が聞こえたが、ぐつただけあってビクともしなく諦めたのか何が起きたのか知らないが全ての音が止んで、また10秒経ってから光輝の悲鳴が聞こえ、それから何の音沙汰もなく3分が過ぎた。

中からは凄まじい音が聞こえるだけだ。

……気になるな。一瞬だけ開けてまた閉めるか。

ゴゴッ　ビュン、ボタン！！

俺が開けて閉める前に何かが飛び出してきた。

その何かは何か分かるんだが、なんて言ったらいいか分からない。

だけど取り合えず…

「済まなかった。」

「済まなかった、で済むと思うかてめえ！！まず何か悪いもん吸い込んで手足が痺れてきて何かいろんな動物の部分が組み合わされてる奴が首輪噛み砕いて襲いかかってきて、奥から不気味な笑い声が聞こえてきて嫌いな花が周りに広がっててその前に川が見えて昔戦場で別れたはずの上司がいて…とにかく死ぬかと思ったんだぞ！！」

ふう、入らなくて良かった。此処で何してるんだ中の人。

別に知りたくないけどな。

「光輝、此処の人の役職は何なんだ？」

「お前無視か？」

俺が死にかけたのを流すつもりか？

お前もこの中に入ってみるか？

そうすれば俺の伝えたい事が完全に伝わると思うぞ？」

「ホントにごめん。絶対止めてくれまだ死にたくないから。」

入らなくても分かるよ。取り合えずこの中に入ったら生きて帰ってこれない事くらい。

「許したくはないがお前の口調が変わるぐらいだから妥協してやろう。」

で、こいつが何してるかだったな。こいつは医師だ。昔はかなり有名な所にいたらしいが、かなり厄介な趣味を持っていたからのけ者にされて、何かヤバイ事件をおこして免許も剥奪されて途方に暮れていたのをここで引き取ったんだよ。要するにこいつは社会不適合者ってことだ。」

………… コイツ等、もしかして全員そうなのか？

「そうか、此処は覚悟ができた時にもう一度出直すことにして、次で最後なんだろう。早く案内してくれ。」

「ああ、次は…………クイーンだ。」

ああ、あの男なのに女王であるクイーンの称号を与えられた奴が。

楽しみだな。

最後に訪れた場所にいたのは何とも可愛らしい顔をした人がいた。

「女顔つばいんじゃないくて、おかまに似た顔をしてるな。」

「それは絶対本人には言わん方が良いぞ。」

分かつてる。本人に言ったら冗談抜きで死ぬかもしれんからな。

光輝が言うにはもう軽い人間不信に落ちいつているらしく、もう目の前でいじり続けているロボットだけが友だと言っているらしい。

依存症どころの話ではないな、それは。

それにしてもここまで来ると狙ってこういう人材を集めてるとしか思えん。

この中に自分が含まれているのが何とも言い難い屈辱だけだな。でも、俺はあのメンバーの中では対して目立ちはないと思うんだけどな。

「こんにちは、新しく此処に入ったジョーカーです。」

「……………」

だんまりですか。さて、どうしようか。まず、こっちを向かせるか。

「こっちを向いてくれませんか？クイーンさん。」

この名前は何度も聞かされているので、かなりの反応を見せた。

まず、スパナとボルトを床に落とし、周りに纏っていた負のオーラが大きくなってしまった。

このまま放置しておいたら冗談抜きで本当に死んじゃうかもな。

「無視は良くないですよ。それに今のは貴方をどう呼べば良いか分からなかったからです。どう呼んだら宜しいんですか？ちなみに俺の事はジョーカーと呼んで下さい。」

今、クイーンは体育座りに指を口の所に当てている状態でこっちを見つめている。

そんなにウジウジとしてたらイライラしてくるな。早く何か喋れや。

「……俺、…名前、無い……。」

名前が無い？皆この国に来ると名前を変えるんだろう。なんとなくそんな気がする。

「じゃあ今度からお前は……そうだな、タロスだ。意味は分かるか？分からのなら後で調べとけ。」

アイツはぶつぶつと自分の名前を呟いている。
気に入ればいいけどな。

「光輝、帰るぞ。」

今回の訪問は得るものが多かったな。

それに、これは一年間ホントに忙しくなりそうだな。

一年後

ある国のあるビルの上で重役会議が開かれていて、それもいよいよ大詰めに入っていた。

「そして、彼の事は採用という方針でいいんですね。」
「だれも反対する者などいるはずもなかった。」

ここにいる誰もがこの一年間の彼の働きは目の当たりにして来てい

て、不気味ではあるが彼を手放した時の代償を考えるとそこは目を瞑るしかないのである。

彼がきてからは経済面でも急成長をとげ、軍隊の方は世界侵略率が2%まで引きあがっており、最近では進行速度も上がっており、もう一年も経てば8%までは達するとさえ言われている。

「彼の任期はこれから3年後まで続きます。これで最後になります
が、本当にいいんですね。」

「では、これから我等のトップはジョーカーに決まりました。これ
にて重役会議を終わりにします。」

彼の世界の改革はまだ始まったばかりである。

2章 戦場の少女（前書き）

AとBは時間の軸が一年程ずれています。

2章 戦場の少女

ある日戦場で一人の女の子が生まれた。

そして、その子の親は戦場から逃げだした。

だが、その国はその様な行為を許しはしなかった。

すぐに追ってはやってきて必死に逃げて逃げて時には闘いまた逃げて、そうして幾つかの年月を越え身も心も芯から疲れ果て、遂に捉ってしまった。

無情にも少女と共に戦場へ送り込まれた。

生き残る為に一心不乱に戦ったが、それでも戦況不利に進み続け敵の集団に追い詰められた。

「私達は構わない。でも、この子だけは。」

親は武器を捨て、少女を背の後ろにやり相手に頼み込んだ。

周りの者はざわめき二つに分かれた。殺せという者助けて上げようと言う者。

だが、その中から現れ躊躇なく2人の親を撃ち殺した者が出た。

そのものは背は低く、漆黒のマントで全身を包み頭には何を思った

かきつねの面をつけ不敵に笑っていた。

そして、絶命寸前の虫の息でボロボロの体の2人を見下ろせる程まで近づいて肩を抱き、震える子供を一見し、声を出した。

「お前らの願いは受け入れた。親切としてこの子の世話も見てあげましょう。……安らかに眠れ。」

親は最後に子供に笑顔を見せ、息を引き取った。

子供は涙を流しながら、仮面の少年に睨みを利かせた。

親の死に際に涙をながし、親を追い詰めた母国を恨み、こんな目に逢わなければならなかった数奇な運命に不条理を覚え、戦争を作り、親を追い詰め、あざ笑うかのような顔を見せ見下しながら視線を向けた少年に怒りを感じた。

普通に暮らしたかっただけなのに、わずかな幸せで良かったのに……。

そうか……君の涙は怒りなんだね。

美しいね……ああ、美しいよ。今空に瞬いているどの星々よりも君の涙をいつくしく感じてしまう。

その瞳の向かう方に僕はいつまでもあり続ける様に……。

それから数年が経った。

「むむむ、嫌な夢を見ました。……この夢を見たって事は殺しに行かなくちゃあなりませんね。」

彼女の名はエレナ、世界征服を企む悪の国の住人

そんな彼女が大きなお城の中で目を覚ましました。

「今日こそは殺つてやります。」

まだ、日が顔を出したばかりの夜と朝の境界の時間に静かに部屋を抜けて行った。

バン!!

「覚悟し……ろっ。」

ドアを開けて勢いよく少女が部屋に入ろうとしたが部屋に一步踏み入れた直後、上から網が降ってきた。

「なんのっ、これしき。」

横に跳躍してかわし、次に目の前から数十もの刃が飛んでくる。

「はっ!!」

ガキキキィィン、

腰のベルトにつけられた鞘から柄がなく、細身の白い短剣を取り出し全て弾く。

彼女のとり出した剣はこの城専属の変態武器製造者の師匠が世に残した10本の刀の内の一振りで名を『白月^{しひづき}』と言い、その切れ味は熟練の者なら鉄でさえも両断し、軽さも短剣であるので申し分ないのだが、リーチが欠点であり、使おうとする者がいなかった一品で彼女が目を付けるまで埃を被るほど眠っていたというか、忘れ去られていた。

「御命貰った!!」

一瞬でベットまで走り、膨らみのある所に短剣を刺す。

「手応えが…」

ドウン、キイン

「残念でした。俺は後ろだよ。」

銃を片手にドアに体を傾けて口を吊り上げて不敵な笑みを少年は向けていた。

「フフフツ、まだまだ精進が足りんな。俺を倒すには3か月早かったようだぜ。」

「三か月って、もう直ぐそこじゃないですか。」

「当たり前だ。お前の親は戦場では有名な化け物だったんだぞ。その血を引いているお前も当然のことながら化け物なのだ。人間が頑張っでどうにかなる境地である達人クラスに俺はもうなってるんだ、お前が見たいに超人になれる奴らと一緒に考えようと言うのがそもそもの間違えであってだな。」

しかももう俺は不意を突かなければ延命出来んほどだぞ。絶対ここに住んでいる奴らは俺の弱さを見くびっているよな。

「フフツ、分かりました。……三ヶ月後までに覚悟してなさい。」

ふっ、甘いな。この城には限られた奴しか知らない逃げ道があるんだよ。それにかくれんぼは俺の十八番だぜ。三か月たったら戦ってやんないよ。

「それにしても、どうしてここにくることが分かったですか？ちゃんと殺気はもちろん気配も殺して監視カメラにも気をつけたのに。」

「ん、それはな。お前の部屋のプライバシーを俺が持っているからだ。例えばだな……嫌な夢を見ました、とかな。」

あら、何か下を向いて震えだしたぞ。はてな……あ、しまったかも……逃げよう。

「……待ちな。お前の命は此処で終わらしてやらあ。」

ヤバい。……死んだかもしれん。

今日も暗殺は失敗に終わってしまった。

初めの内は今よりずっと簡単にボロボロになるまでやられていた。

あの人はかなりのサドで女の子にもお構いなしで、私が出会って来た同年の男の子は本気で殴ってきた事なんて一度もなかったのだから、ちやめちや痛かった。実は彼と私は同じ年らしい。

来る日も来る日も襲いかかってはやられるのを繰り返していた。その内見かねた戦闘部に入っていた女性の人が先頭しなんをしてくれた。

この時は全然知らなかったけど、見かねたのは確かだけど鍛えるようにいうのは彼だったらしい。

彼は今でも憎いし許したくはないけど、私は今の暮らしが親と一緒に逃避行していた時以上に気に入ってしまったている。

皆と笑って時には泣いて、ちょっと変わった世界だけど何よりも望んでいた幸せを見せてくれた彼に今は素直に感謝していたりもしている。

そして、歯車は回り出す。

押せば外れてしまうような歯車だけど、今日も今日とて回っていた。

囚われの御姫様 ファースト（前書き）

永らく更新できなくて済みませんでした。

また何時になることが知れませんが・・・。

囚われの御姫様 ファースト

私は昔からお城の外を眺めることしかできずにいた。

お城の外は危ないからと教えられて、ずっとお城で暮らしてきて、でも興味はあつたし何度も何度も外へ出たいと思い何度夢見たことか。

でも、今は何時でも出て行ける。

彼が出してくれたから……。

囚われの御姫様

ある晴れた晴天の下で彼は数人を集めて訳を直ぐに把握するには容易では無い事を言い出した。

「結婚式に招待されたから行ってくる、お前等同行してくれ。」

「……へ？」「」「」

この場に呼び出されたのは全部で四人でまずは光輝、アレクにエディ、エレナである。

「面白そうだな、うまいもんも食えるんだろ？」

「ああ、いっぱいあるぞ。」

「おいおい、他にあるだろ聞くこと。」

「そうそう、そんな直ぐ言われたって着るものどうするのよ。」

「心配するな、ドレスを数着買ってある。結構盛大な結婚式だから良いものを用意してある。」

「そうなの、良かった。」

「それも違うだろ。」

「ああ、お前の言う通りだな。警備は4人で足りるのか？それに2人はまだ半人前だぞ。」

「それも多分大丈夫だ。その警備は万全だからな。」

「そこもやはりぬかりはないか。」

「隊長も一番まともな事言ってますけど少しずれてますよ。」

この組織の中では一番と呼んでいい程のまともな精神の持ち主であるエディはいまや完全な突っ込み要因である。

「取り敢えず予定話すぞ。」

結婚式自体は三日後だ。だが、さっきも言ったが盛大に行うらしくてな二日後には披露宴が行われる。明日には現地についておくつもりだから今から準備して来てくれ、一時間もあれば済むだろ。じゃあ、外に集合だから解散してくれ。」

皆は直ぐに部屋を後にした。

「あいつは何を企んでるんだろ。」

部屋の外にですぐにエディがポツリと零した。

「さあ知らねえし特に興味ねえな。今はどんな料理が出るのか楽しみで頭いっぱいだぜ。」

光輝は食うことばかりである。

「私もそんなに気にはならないわね。てか、気にしたら負けな気がしてるし。絶対時が来たら話すとか言っただけで教えてくれないだろうしね。」

案外エレナは普通に答えた。

最後に隊長の意見の番となつて皆眼だけを向ける。

「まあジョーカーの事だ。何か考えがあつてのことなんだろう。あいつはいつも掴めない感じだからないまきにしても仕方がないだろう。俺は言われたことをやる、それだけだ。」

言われたことをやる、とは固を持っていないようであるがそれ自体も確固とした意見であり考えである。だから、そんな隊長をエディや他の隊員達は目指してついでに行くのであり今彼が考えるなど言われた彼はこれ以上の詮索を止めにした。

「いつの間にこんなにたくさんの服を部屋に運んだのよ。」

彼女が部屋のドアを開けると数十着の服と大きな鏡が堂々と並べられており、服を見てみようと思つてみると紙が置かれていた。

『この中から二着を選んでハンガーに書いてある番号を此処に書い

ておけ。手に取るのもよし着るのも切るのも自由にしていいが、早くしろよ。』

早くしろって言われても、……全部試着してみたいし。

徐に何とも無しに紙の裏も見てみるとそこにも文字があつた。

『P・S 日本には【馬子にも衣装】という諺もあるのだ。慎重に選べ。』

違ふ国の言葉が入っていて読めない所もあつたが、後で光輝にでも聞こうと流すことにしてポケットにしまい服を手に取った。

「うん、これも捨てがたいわね。」

早く済まそうとは分かっているてもそこは女の子な訳でかなり服を着てかなり悩んでいた。

「やっぱり……これかな。」

「俺もそれが一番いいと思うぜ。」

「そうね、……うん一着目はこれにして二着目は……」

「三番目に着た奴なんてどうだ。」

「うん、あれは……」

ジャキッ

愛刀を彼の後ろから喉元に突き付ける。

そこまでの動作は彼に何もさせない程の完璧な動きだった。

「お前、そんな動きが出来たんだな。凄い成長だぞ、嬉しいぜ。ところで、いくら女の子に密着されているとはいえども刃物突き付けられてたらドキドキはするけど嬉しい方じゃないんですが、それにその顔めちゃめっちゃ怖いんですけど。」

彼女は満面の笑みを浮かべていた。

「ふふふふつ、怖いですって御冗談を。何時からいらしてたんですか？」

彼女の笑顔見るのひっそりだなー。クリアするのがものすっげえハイリスクだけだな。

「今来たばかりですよ、覗きなんて犯罪行為を俺がやるなら大胆かつ繊細になんてやり方時によつてはするかもだけど普通はやらない痛つて、一皮切れてるぞ血がでてるから、それにジョークだよ。」

まだ見ぬ神よ、今この場この一瞬だけ信じます。どうか俺に打開策を下さい。彼女、何を言っても聞かないどころかどんどんオーラが噴き出ています。

そして、ドアが開き誰かが入ってきた。

「…ッ！！どうしたんですか！？」

入ってきたのは婦長のミハネさんで若いのに他にも料理や掃除、洗

濯とにかくいろんなことができるスーパーな人で今年になって漢字の画数が三画になる一つ手前まできて相当焦ってきている
みたいだが、このことは絶対のタブーとなっている。

「今、とんでもない程までの礼の失ったことを考えたり何かしてくれやがりませんでしたか？」
彼に料理人の命を向けながら尋ねた。

「いえいえ、誤解ですよ。考えていたのは精々お綺麗だなんて位です。」

「ところでなんでそんな状態なんですか？」
さつきまでとは打って変わった声である。

「それはですね「覗かれました。」

「エレナちゃん首を撥ねて一撃絶命なんてだめよ。ちゃんとンスターボールでも捕まえれる位まで弱らせてからじゃないと。」

「それもそうですね。軽率でした。」
エレナは彼に突き付けていた刀を鞘に収めてミハネさんの所にいった。

彼は浴びていたオーラから解放されたことにより抜け出していった
緊張によりへなへなと床に座り込んでしまった。

かみいいいいい！！くそつ、そうだったな。お前は俺が嫌いだったんだつたよな。

お前に頼んだ俺が愚かだったぜ。もういい、お前の助けなど期待はするが当てにはしない。自分の力で生き残ってやる。

あの二人はドアの近くにいるのでドアからの脱出は無理っぽそうだな。となるとやっぱり三階とはいえども……窓しかねえんだけどエレナさんに腕を掴まれました。

「いやですねえ、何処に行くんですか？これから良いところなんですよ。」

彼らは俺の帰りを信じて一生待っていてくれるだろうか？あの日あの時約束を交わした誓いの地で……冗談はほどほどだな。

「お前が時間に遅刻するなんて珍しい事もあるんだな。ところで何であいつはあんなに機嫌がいいんだ？あんなに笑顔なのはかなりレアだぜ。」

「彼女の笑顔をみるのはたいへんだつたよ。そのためにはまず誰かが不幸せにならなきゃあならないからな。それよりも時間だからもう出るぞ。ヘリに乗れ。」

皆が搭乗した。運転するのは隊長である。

「エディ、俺が到着するまで冗談の大切さと危険性を教えてやろう。」

囚われの御姫様 セコ〜ンド

私は只の人形に過ぎなかった。

あのお城では何もする事がなかった。

広い空を眺める事も、地を蹴る事も、人と話しをする事、そして笑うことさえも叶わなかった。願うことすらできはしなかった。そこに自由はなかった。

それがどんなに悲しい事なのかを知る事が出来たのも彼のおかげだったのだ。

く 牢獄に閉ざされた少女の心く

「これより、披露宴を執り行います!!」

司会の男が会場いっぱいに響き渡る程の声で叫んだ。

「なあ、なあ、もう飯食ってもいいかな。俺うまそうな物見てたら急に腹減ってきちまったんだよ。」

「駄目に決まってるでしょ。全く、もっと年上らしくちゃんとしてよ、注目浴びるでしょうが!!」

「2人ともお願いだから静かにしてよ。（それに注目なら最初から

ずっと受けてるからね。」

会場の端で行われているこの会話は周りの人達からしたらかなり遜色があるようだ。

他より年も若いということもあってその感じは一層強く注目の的であり、そんじょそこらの人なら叩き出されている所であるだろう。

だが、それは叶わぬのだ。どれだけ彼等にストレスを感じても彼のお供の者となると簡単には行かなくなる。

「なんだか皆さん済みませんね。あの者達にもこういう場を経験させてみようと思ひ連れて来たのですが、なんだか粗相のない様で。彼らには明日はこの様なことのないように言っておきますので。」

「いえいえ、構いませんよ。貴方が来てくれただけで十分なのでから。」

「そう言ってもらえると有りがたいです。」

確かに普段彼はこのような場に招待こそされるもの行きはしないので、それ故に彼と直接会って話す機会など滅多に来ず、それだけで価値があるのだ。

「ところで、クロロ氏はどちらにいらっしゃるのでしょうか？一言挨拶をしておきたいのですが。」

「彼ですか？今は裏に控えています。呼びますか？」

「ええ、お願いします。」

彼と会話していた年配の少し腹の垂れて来ていた男は近くのウェイターに話しかけると一分としないうちに呼ばれた男がやってきた。

「お久しぶりです、ジョーカー殿。」

「ああ、久しいね。クロロさん。」

ジョーカーとクロロは握手を交わしながら言った。

「では、貴方達もそう暇ではないでしょうから僕は彼らを宥めてきます。」

「できればまたお会いしたいですな。」

「ええ、近いうちに。」

仮面のしたの彼の顔はご機嫌そうに笑みでいっぱいだった。

「おい、お前ら。騒いでないでちゃんと花嫁の方も見ておけよ。」

「わあ、ばばっでるよ。」

「口にも含んで喋らないでよ。」

「お前ら少し静かにしている。目立つのはしょうがないとして煩くするのは止めておけ。俺は気にしないが周りの者が気になって仕方がない様子だ。……次騒いだらお仕置きするぞ。」

彼の最後の脅しもあつてそれなりにスムーズに進んで行き、パーティーは終わりを迎えた。

「さて、お前ら突然だが今日のパーティーで何か感じたことはなかったか？」

とあるホテルの一室で三人を集めて彼は切り出した。

「そういえば、今日の所は何か息ぐるしかったかな。閉そく感もあった。」

「確かにそんな感じはしたわね。」
皆同意の意である。

「フフツ、あそこは格式やしきたりに厳しい所があるからな。まあ、その答えでも上出来だよ。では次の質問だ。お嬢様はちゃんと見たか？どう思った。」

「言われた後見て見たけど、若くて綺麗？というか幼くて可愛いって感じだった。新郎の方は三十も半ば程に見えたけど。」

これも皆共通しているらしく、二度三度と頷いた。

「それに、花嫁の方はどう見ても楽しそうでは無かったわね。」

「あそこの家で生まれた姫は三つ頃になると、お城に閉じこもらされての教育が始まる。主にテーブルマナー、敬語、下の者への態度などあらゆる方面から指導を受けるらしい。親には会うどころか写真を見ることが叶わないらしい。そうして出来た心の掛けた人形を十五程の歳で他国との結び付きに用いる道具として使っている。だ

けどな、その子も夢をもっているのだ。外を走ったり、空を見上げたり、なにより思いっきり笑いたいそうだ。人目を気にせず他者の顔色を伺ったりせず自由に生きてみたい、……分かるか？一見も二見もほんの些細な夢に見えることもかもしれないがそれは当たり前で暮らしている者だからこそその意見だ。彼女にとってはこの心が月並みのような発想なんだ。」

斜め上に固定されていた顔を正面に向け直した。

「この件は数日前に城の人間から頼みと一緒に聞いたものだ。……今回は軍のことは全くとっていいほどまでに関係性が薄い事、つまり只の俺の私情だ。これで最後の質問だ。お前らは御姫様救出作戦に参加するか？」

「お前がやりたいんだろ。だったら俺はやるぜ。」
光輝が即答する。

「ここまで聞いて黙ってられないわね。結婚相手国のロリオジどもに女の子の強さ見せてやるわよ。」
彼女も気合い十分である。

「で、お前はとうする？ここで留守番してもかまわないんだぞ。」
「はあ、俺だけ行かない訳にはいかないだろ。行くよ。行けばいいんだろ。……たく（もつと適任の人なんて沢山いるじゃんか）。」
エディには不満も残っている様だ。

「自分を卑下するのは悪い事だとはつきり言うことは出来ないし悪いとは言わないが、あまり自分を低く見積もり過ぎたりはするなよ。もつとお前は自惚れる。でないとその内自分を見失う事になってるやもしれないぞ。今回はお前だからここに連れて来たんだ。……」

隊長を呼んで来い。」

2人は程々に聞いていたので何だ何だと目を丸くしているがエディは急いで隊長の部屋へ向かって行った。

エディは最近自分の事で悩んでいる節が少しあった。

それもそうかもしれない。エディもまだ子供である。だが、子供においてはかなり強くいると思っていた。自分が周りの者より劣っているのは年が離れているからだと言い聞かせていた。

だが、そうでないかもしれないと感じ始めてきたのだ。

まずは彼の入隊である。最初こそ卑劣な手で掛かってきたけれども、一年たった今でも彼には勝つどころか放されて行く感覚さえしてくる。それも、彼の方は日中部屋で事務的活動に比べこちらは四六時中訓練にも関わらずである。

でもそれはまだ彼が天才だからだと納得しうる事が出来ていた。

そこでの彼女の登場である。

彼女は最初こそもたついていたが、その壁も数月もすると超えてしまいそこから急成長は彼を除いた皆が驚いたことだ。最近では彼女と共に訓練に励んでいると気を少し抜いただけで放されてしまう程まで差が開いてきた。

自信もなくなってきたても不思議ではないと言える。

そして、今彼は、彼が自惚れろと言った。下にみすぎると言われ

た。

自分でなくてはいけないのだと言ってくれた。

自分に何があるのか聞きたい気分ではあったが、目頭が少しあつく
なってきた見透かされた様に言われて泣きそうになりながら飛び出
して行った。

彼は自分がここにいていいのだと、ここで必要とされているのだと
思い少し安心していた。

「隊長、あいつはここからですよ。これからは今まで以上に頼みま
すよ。」

「ああ、分かっている。あいつは子供の出来なかった俺にとっては
我が子のようなものだからな。いくらあなたが止めても気にします
よ。」

「クフフツ、頼みましたよ。今はまだ小国を相手としているので問
題になってませんが、これから先の大国を見据えるとまだまだです
からね。」

「ああ、それも分かっている。」

そう思っているつもりだよ。

貴方は何も分かっていない。何が我が子のように。年老いた主観を
持ったりしやがって。

物事を総体的に捉えることの出来ない貴方には無理ですよ。

貴方の先は知れている。

囚われの御姫様 サアーン（前書き）

この小説を待っている人がいるのかは知りませんがいたら更新遅くて済みません。夏になったら少しはマシになると思います。

囚われの御姫様 サアーン

譬え私がおばあさんになっても、どんなに物忘れが激しくなったとしても、

あの日あの時あの場所で、貴方と交わしたあの言葉、貴方と過ごしたあの時間、あの時あの一瞬に起こったあの刹那も、私はずっと覚えていきます。

私は死ぬまで忘れたく有りません。

忘れることも出来ないけれど……

御姫様の今夜一夜限りの騎士様ゆかいなナイト

草木も眠る丑三つ時、城外に生い茂っている森の中に五つの人影が動きを止めた。

「やつのことで鉄壁を誇りにし続けている領主の待つ苔むしている古城に辿りついた訳ではあるが……準備はいいか？警備はいつもとよりバージョンアップしているが……良くなくても始まるけどな。」

顔の右半分を覆うほどの仮面を付けた全身黒衣の少年が4人の方は一切向かずに背中越しにい語り掛けた。

「おつけです、サー。」

ジーンパンに皮ジャンを着ている所までならそこいらで日がな一日面白おかしく暮らしているお兄ちゃん達と比べても遜色は無いが、腰に下げたホルスターに掛けられている銃と胸ポケットのアーミーナイフを所持している所を見ると普通ではないであろう陽気な人物である。

「いつでもどうぞ、」。

彼女はロングコートを着て身を竦めてはいるが、腕に空からの月光の反射で淡い光を放っている短刀を握っている姿は町中に五分も経っていれば腕に鉄の輪っかが2つと鎖がついている物を取り付けられて非常時には信号を清々しいまでに無視出来る黒と白で色付けされた車に青い服を着た人達に乗せてもらえるだろう。

「えーっと、取り合えず生き残る。」

「生き残る事に取り合えず程度の価値しか見いだせないならお前の価値は知れるぞ。それに悩んだ結果にそんな仕様もないことを言う位なら、どうせなら一度は言ってみたかったカッコいいセリフやロマンチズムなセリフを言ってみるよ。そんなだから陰でどこか目の前で臆病者^{チキン}なんて皆に言われるんだぞ。」

言葉攻めにされた彼ではあるが、背中越しに指を立てたのが唯一の反抗心だったりする。

「ああ、こちらも了解だ。」

最後になったのは迷彩服を着た筋肉質のこういう場にいると如何に

もという姿の人物であり、実際彼以外の者は場違いにしか見えないところか子供なのである。

全員の確認が済んだ所でやっと仮面の少年は皆の方に姿をやった。

「よし、じゃあお前等命をつなげ、俺らは打って一丸となりボスカ
ら味方キャラを手に入れるぞ、分かったな。」

言葉の代わりに皆は眼力で彼に気合いの程を伝え、彼もそんな皆を
見てにやりと口をやった。

「途中の言葉がよく分からないんだけど？」

「・・・日本の諺だよ。」

「後十秒で相手が策ならメイドイン俺の爆弾になる予定だ。」

そして、皆が心の内でカウントダウンを行ったが、何も気配はない。

「どうやら策じゃあないらしいな。じゃあ、次は5秒後の爆竹&花
火だ。」

パパパパパウウウン、ピューツ、ピューツ、

彼の言葉の途切れと共に始めた愉快な音は中の者の爆弾が仕掛けられていたことで増幅されていた多大なる不安を数倍まで引き上げる
ことになり、場内の警備及び上層の人間は慌てふためいた。

さらに、城外にいる人が見た城から上がる花火の光景は披露宴の時の
ライトアップとは一味違う景色に見えていた。

「行くぞ、相手は猿だが油断は作戦に以上がないまでに抑えておけ。」

ー

パチッ

彼の指を弾く音で皆が一斉に二方に動いて行つた。

僕はつい最近給与がそれなりという理由だけで親に入れられただけの極普通の警備兵Aだった。

最初は仕事が難しくて嫌々生きていたのだが、上司のクロロさんが凄くいい人だったので近頃はもつと近くで働いてみたいと考えていた矢先に、爆弾を仕掛けた人物が現れてそいつを捕まえた者には褒美がでる、階段特進等と言われた日には精を出して皆が行きそうにない所を回っていたのだが、突然視界を黒衣が覆ったかと思うと、鳩尾に肘を入れられて悶絶しているところを人質にされてしまいました。

そして、耳元で「私は世間で言うジョーカーという者だ。大人しくしてしてくれた方が私も君もリスクは少なくすむんだ。……クフフツ、心配はそこまではいらない。ククククツ、君の頼れる上司のクロロ氏なら直ぐに助けに来てくれるはずだから、それまでの辛抱さ。…この紙は後で開きたまへ。」等とささやかれた時には大人しくせざるを得なかった。手渡された紙は小さく丸めてあった。

（此処の者にも平等に知るチャンスは与えたぞ。……君はクロロ氏
が来るまでに気づけるかな？多分無理だろうね。なんせ君は彼を微
塵も疑っていないみたいだから。）

彼が人質を捕まえて数分後に先の廊下の方が慌ただしくなってきた。
した。

先頭のクロロを筆頭に五人の者がやって来て、その後ろを金魚の糞
が続いてくる。

四人のお供と彼が四、五メートル先で動きを止めた。

「フフフツ、またお会いできましたね。クロロ氏。」

「そうですね。ですが、この騒動はどういうことですか？出来れば、
左手のこれ見よがしに怪しげなりモコンと前にいる私の部下の事も
知りたいのですが？」

左手にはいつの間にもやらいボタンが三つある輝きを放つリモコン
が握られていた。

「では、まず貴方の部下ですが、この少年は最近入隊してきたペル
君隊員番号0732、二十歳A型身長177cm体重65kgでこ
れまでの実績は特に無く、これからも当分の間は下っ端で貴方が覚
えておくような人物ではありませんよ。（嘘を言い連ねているだけ
だな。）」

この時の反応は二種類であった。

素直に受け止めて凄いと思い呆気にとられた者と、彼にぞっとした
者。もちろんクロロ氏が連れて来たもの達は後者の方で数瞬で目の

前にいる人物が自分達の思っている以上に物凄いのだと感じた。

「後このリモコンはね。実はとくくってもすんげえ爆弾さんを起爆させるスイッチだったりしちゃうわけなんだな。」

「それだと貴方も無事ではないのでは？」

「のん、のん、のん、ノープロブレムですよクロロ氏。爆弾の威力事態が大差あるのではなくて、真に怖れるべきなのは爆発により辺りに広がっていく新型殺人ウイルスの方なのでから。」

この声が聞こえる範囲にいた者がざわめき出した。始めに恐怖にののき声を上げた者の数はしれていたがその騒ぎは周りのもの達にそれこそ感染ウイルスの様に広がっていき、志向は完全に停止まだ少し冷静を装う者がなだめにかかるが、その甲斐はなくそこから少し離れた場所にいた彼と別の方に進んだ2人にも耳に出来た。

「フフフフツ、フフフ、ハハツハハハハツ。」

その騒動の中に一つのとても大きな高笑いが過ぎていく。

人間なんて脆い者だな。

ちよつとつittedただけでこの様だ。

それに、何が怖いのかも分からない癖に俺の手のアクターに便乗しやがって。

………だから、嫌いなんだ。

「隊長、今のつて？」

「ああ、」の言っていた合図の事だろう。行くぞ！！」

「はい！！」

エディと隊長は城のジョーカーとは反対側にある扉の油断し切っていた門主二名を吹き飛ばして勢いよく城の中に入って行った。

数十分前 林

「エディと隊長はまず、城の裏側の扉付近で待機だ。そして俺が大きな何でもどんな変な音でも兎に角合図を出す。そして一気に扉の前にいるものを気絶させるのがベストだがしなくてもいい、入ってこい。そして後は敵の主力人物が来るまで適度に暴れて人を引き付けておいてくれ。隊長にパーティーの間ずっと城を見学させていた報告を聞いて思ったことだが、恐らく城を傷つけるような銃器類は使ってこない。となると必然に接近戦になるが2人ならなら問題はなかるう。」

……隊長手筈通りに。」

その時、2人は目配せをして意思の疎通を行った。

ドカツ、バキッ

2人は彼の言われたとおりに適度に暴れていた。

「それにしても、いったい何人いるんですかね？」

「さあな、だが幾等多人数でも下っ端にはここまで訓練が行き届いていないとはな。」

二人の人間に何人もの人がやられるのも情けない話である。

「そうですね、この分だと要の人物も大丈夫そうですよ。」

そして、今度は4人が近づいて来た。

前を行っているエディは一人、二人、三人と倒して最後の人物に駆け寄る。

そのものは長い袖で腕を隠し、帽子を深く被って少し不気味な感じであったが、エディは構わず走り寄り、目の前まで来た。

……その者の不気味な笑みと後ろの隊長の静止の声にも気付かずに。

ザシュッ！！

「エディ！！」

彼は騒動の中から抜け出た後、迷うことなく城を走り抜けていった。

それもその筈、彼にはクロロ氏と言う案内役が居たからである。

「それにしても凄かったですね。あれのお陰でここの中が思いのほか進みやすいです。」

「クフフツ、ただど本題は次の相手からですよ。ね、お爺さん。」

「ひよひよひよ、よもや気付かれておったとわ。流石、^{ベルソナ}仮面の^{クラウン}道化の名は伊達ではないということかの。」

呼びかけられると後ろから前に一人の身軽そうなお爺さんが回り込んできた。

「クフフツ、クロロ氏。では手筈通りに。」

「ええ、我が師は私が相手になります。」

「ふおっほっほっほ、お前も懲りんやつじゃな。」

ガキイイイン！！

クロロ氏は背中の中の身の丈程の大剣を爺さんは腰にさしてある細見の剣を交えて受け、彼はその横を堂々と横切って行った。

「師匠、随分と簡単に通してくれましたね？」

「ふおっふおっ、偶には弟子と剣を交えるのも悪くないと思つての。」

「

クロ口は大剣を何とも無さそうに素早く振るい、一方爺さんは軽快な身のこなしでそれを避けていく。

「隙有りじゃ。」

大剣を大きく振るったところで、彼目がけて剣を突きだした。

違う、罠か？

大剣は床に刺さりそれを軸にして止まって突きを避け、同時に蹴り飛ばした。

だが、直前に気付かれた事もあってか大したダメージはない様で軽快に一回転しての着地を決めてみせた。

「ひょひょひよ、少しはやるようになったようじゃの。おちおち舐めてもらえんようになってしまったか。……では、次からはちと本気でいくぞ。」

「望むところです。勝負です、師匠。」

互いに剣を相手に向け、視線を合わせていた。

先ほどから少し城内が騒がしくなってきた。

私には関係のないことですね？

私は明日結婚してやっと城外にでられるのだから。

その先はまた直ぐに向こうで部屋の中で暮らすとしても。

希望を言えば自分の足で外にでて自由に外に行来きたいのだが、その様な希望はもう随分前に捨ててしまった。

いや、この様な考えが思い浮かぶのはやはりまだ希望を捨てきれないから。夢を見ていたいから。

ここの外の世界を、お父様の所に来る前のお母様の居た場所で暮らしてみたいから。

でも、それは叶わぬ願い。だって、私は……。

「こんにちは、ご機嫌いかがですか？王家の囚われの御人形さん。」

囚われの御姫様 サアーン（後書き）

この囚われのお嬢様編は長いっす。

俺としては前編、後編で行きたかったんですが、思ったより書くことがあつて長くなってますが、次がこの編の最終です。

これが終わったら少し対戦とは離れて日常行ってから大戦に突入させるつもりです。

早く革命させろっと思って思う人もいますが、日常も大事ですからねって所で終わります。

囚われの御姫様 フォ

こうして大きな夜空を眺める事が出来て、おもいきり外で風に吹かれながら走る事が出来て、皆と楽しく会話して、笑っていられる。

皆は当たり前とか大袈裟だつて言われるけれど、私には人一倍幸せに感じていられるのなら、あの場所で暮らしてきたことの全てが無駄じゃ無かった気がします。

いつかは皆で貴方も一緒に……。

〃〃騎士様ていしやうといろんな動きと思惑〃〃

「こんばんは、ご機嫌いかがですか？王家の囚われの御人形さん。」
彼は目の前に佇む少女を下から上まで見つめた。

少女の顔つきは可愛らしい顔の割に14、5の年齢にしてはしっかりとしたものに見えるのは憂えを含んだ目ときりつと結ばれた口元の性だろうか。服装も城にあった着るのに時間のかかりそうなくかりとした物であったがこれは特別な日だからなのか、又普段から

こうなのかは分かりきらないが、着こなしは上々である。部屋の周りの家具も高級感こそあるが別段使われている様子もないことからアンティーク扱いなのであろう。

飾りはしつかりとしているがここは中身のないものが多いな。そんなことだから数人の侵入者としつかりした内通者一人だけに踊らされるんだよ。

彼は大丈夫であるが、少女の方はこの沈黙がお気に召さない様子でそわそわしだした。

だが、このような事態にあったことがないこともそうだが、自己表現をしたことがあまりない彼女は何を言ったらいいのかわくも悪くも分からないお手上げ状態のようだった。

彼はそんな彼女の様子は気に入ったのだが生憎と時間が余りないのだ。

「私達は先ほどから場内を騒がせていたのですがそれは知っていましたよね？」
彼女は頷く。

「実はあれは貴方のためなのですよ。アウロラ王女、貴方は今決断の時に至っているのです。今ここでこの王家の古くからの習慣による柵の鎖を断ち我々と共に貴方の抱いていた自由を辛くなるか楽しくなるかはこれからだが現実をそれらを得るため、掴むために自分の足で動くか、それともこのままここに残って普段の貴方の中に型付くられた日常をただただ平和に生きるのか、シンプルな答えが欲しいですね。第三の選択肢というのもありますよ、どうしますか？」

普通の人間か彼女は怪しいが家柄を除くと普通の思想の者がいきな

りこのような選択を迫られて対応しきれんだろうか否、出来はしない。日常の中に異常とは得てして突然現れるものであるが備えの無い者の前に現れてしまうと何のアクションをおこすことも叶わなくなってしまうのだろう。

彼女は悩みを頭に送り続けた影響で困惑を起こし始めたのだが、彼人は人を洗脳とは人間こえが悪いが良く聞こえる様に例えるなら導くことには昔からかなりの時間と経験を積んでいるのである。

「申し訳ないのですが、私達には貴方に十分な考える時間を与えていられる程の余裕を持ち合わせていないのです。ですので決断はぎりぎりまで待つことにしましょう。取り合えずは私と行動を共にしてみませんか？貴方はこの城の中でさえ自由に歩くことが出来なかった筈です。そして、それをする事で何か考えが浮かんでくることもあるかも知れませんよ。」

「でも、貴方達は………いえ、でも………。」
まだ彼女は答えあぐねる。

「私達について来て貴方が普通の暮らしをすることはかなわないでしょう。ですが約束します。必ず貴方には自分の意思による行動が出来るようにします。まあ、それはここを無事に出れたらの話であり途中で失敗することもあるかも知れません。そして、それにより貴方がこの者による罰則を受ける事はないようにもします。貴方は、無理やり連れられたとして我々は動機を話すこともありません。………さあ、王女信用して下さいませんか？」
彼は彼女の方にずっと手を伸ばす。

彼女の手が焦れつつく徐々に徐々に伸びていき、彼の指に触れた所で又少し引いてしまった。その時に彼が微笑み彼女は相手との迫った距離に気付き妙に恥ずかしくなったのか、頬を赤く染めて顔を斜

め下に向けて手を掴んだ。

「では、行きましょう。」

彼女は一度も後ろを見ようともしせず手を引かれていった。

自由は与えてやるがそれを生かすのも殺すのもお前次第だけだな。
世間知らずの御姫様がこの悪意と私欲の世界でどこまで出来るのか
見ものだな。

「お前の幸せが誰かの不幸にもなるんだぞ。」
誰に言うでもなく小さな声で呟いた。

キーン、ガッ、ガガガッ、

決して広くない廊下で老人と青年が一進一退の激闘を繰り広げている。

「本当に強くなったのう。ついこの間までもっと簡単に捻られて可愛かったというのに。それに、わし等の為に教えた剣術をわし等に返されるのはそれもお主がとはいやはや青年の心とは分からぬものよのう。」

クロ口が距離を取ったのを見て言った。

「ははっ、何を仰しゃいますか。私が真に仕える主は昔から王女様でありそれは昔にあの人の母君にお願いされてから少しも変わりありません……よ。」

彼の確固たる決心は迷いのない剣跡から伺える。それは師である老人には始まりから分かっていた。では自分は彼に本気で対応出来ているのか？ いや、そうではない。まだ本気で向かい合うことは出来ていないのだ。今までしてきたように遊びの軽い気持ちでしか彼に向き合えていなく、それが真剣な相手にどんなに失礼か自覚していてもやはり愛弟子である彼には出来ないでいた。今対峙している相手が違う相手であつたなら、そのような考えが実力で上回つていても彼を捉えきれない要因になつていて、全盛期を過ぎた体に加えて無意識に鈍らした動きは必要以上の体力の低下を招いていて避け続けていた攻撃を今では全て剣で受けているのが現状である。

「何を考えてるんですか？」

ガキイイ、ドゴオ

老人は隙を突かれたことで剣を上弾かれ腹に蹴りを貰つてしまった。

「ぐうう、老人は労わるものだとか教わつたことがなかったかの？」

「戦場で情けを掛けてはいけないとも貴方に教わりましたよ。」

老人ははっとなったようにして表情を渋らせる。

「そうか情けか。…どうしても…どうしてもわしを越えていくつもりか？」

歴戦により身につけた気をぶつけながら言い、それを真っ向から受けて答える。

「はい、貴方が王女の鎖の一部になるのなら。」

「……一目見て感じた。あの男は信用ならんぞ。お前が利用している気になっていてもあやつはその気さえも飲み込んでいるような恍惚な奴じゃ。」

「それを見抜く眼力は持ち合わせております。」

「全て承知の上でということか？」

「…はい。」

「この老いばれがこの歳になって又趣味以外で戦うことになるのは。言葉はもういらぬ。行くぞ。」

「はい。」

そして、老人とクロロとの戦いは第二ラウンドに突入した。

「エディー！…！」

一階のフロア周辺に威厳のあるしつかりとした声が響いた。

エディは帽子を被った男の後方に勢いよく飛ばされていったが、直ぐに立ち上がって相手を睨んだ。

「まさか僕の方に飛んできるとは考えなかったよ。咄嗟にしてはい反応だね。普段の振舞いは兎に角として動きはしつかりしてる。」
歳の程は見た目では背が170cmあるかないか程度の小柄な所と今聞いた声で判断すると、20回りに思える。

「避けれるさ。俺達はこの奴らみたいなやわな訓練受けていないからさ。」

少し切られた腹をさすりながら言った。

「ははっ、言っておくけど僕等も君たちと同じ不法侵入者だよ。この人間とは一度も面識なんてないからね。」

二人は訝しげな表情を見せた。

「じゃあ、……何なんだ？お前達ってことは何処かの国の者なのか？」

「特にこれと言った名前はないんだけどね。強いて言えば……神の使徒かな。」

相手は随分と自信を持って堂々と宣言したが、これで納得する者も居る筈がないだろう。

「ふざけてるのか？」

「別にお前等に理解してもらうつもりはないさ。ん〜で、そろそろ話しも止めにしないかい。そろそろ殺りたいんだけど。」

隊長が前に行こうとしたが、その前にエディが出た。

「隊長ここは大丈夫ですよ。隊長は隊長で」から言われてやること
があるんじゃないんですか？……本当に大丈夫ですって。いざとな
ったら逃げますから。それにこれは俺が受けた戦いですよ。」
隊長は何も言わずにその場を後にした。

「じゃあ始めようよ。」
相手はうすら笑いを浮かべてエディに襲いかかってきた。

誰だ。彼は思った。

彼と御姫様が廊下を歩いていると右の角から一人の男が姿を見せた。

「こんな所で何をなさっているんですか？」
彼は御姫様から手を放して言った。

「貴方をお待ちしていたんです。」
男は答える。

「私を、それは何用ですかね。」

「神の命を受け貴方を殺すために来たんですよ。」
何だと！！

瞬間彼の気配が豹変した。

普段纏っている人を斜めから見ている様子であるが、彼の言葉を聞いた途端に相手を目を見開き真っ向から対峙した。

今…こいつは何と言った。神、神だと言ったのか？宗教者か？いや、殺しにきたんだぞこいつは。

俺を、神の命^{あいつ}を受けて。そう言ったんだ。そういう意味だこれは、

「どうしたのですか？」

男の顔には少しの笑みがうかがえる。

黙れ！聞くことを訊いたら貴様は直ぐにでも殺してやる。それよりもあいつだ。いまさらになってこんなことを、殺すなら5年前のあの時に殺せば良かったものを・・・。

ん、ふつ。

ふつ、ふふつははははっ、貴様がそうしたいのなら思い通りにさせるか。

「お前殺しに来た・・・と言ったがその真意は何だ。ただ単に俺を殺せと言われただけか。」

彼は姫を下がらせてジョーカーを止め、彼個人として相手と対峙した。

「さあ、私は神がおっしゃったというのできたものですからね。唯最近貴方の元に勢力が傾き始めたと聞いた事がありますけどね。」

待て、今の言い方。こいつは本当に神を知っているのか？それにこいつは馬鹿なのか、こんなに簡単にべらべらと内情を喋り出すとは。

「お前、自分達の事を簡単に話してもいいのか？」

「大丈夫です。殺す前に貴方に質問を受けたら話してもいいと思ったことは喋ってあげなさいということなので。」

そうか、あいつは何処までも俺を舐めているようだな。その方がやりやすくいいが不愉快だ。

「済みませんが次で最後の質問にして下さい。次の仕事がありますから。」

くそっ、あと一つか。それに答えられないものもありそうだな。最も俺にとっては意味のない事だな。

彼は右の目の方に手を置いて考える様な素振りを見せた。そして男には死角になるように笑みを作る。

…行くぞ。

「無駄だと思いますよ。貴方が神から貰った『物』の事は聞いていますから。」

まああいつは神だからな。この力のことを把握していてもおかしくないか。

これを使うと疲れるからな。止めた方が良さそうだな。

「では、最後にして聞こう。……俺は誰だ。」

「クライシスのトップのジョーカー。」
世間一般に通ずる率直な答えだ。

「そうだ、その通りだ。この不安定な世界を揺るがさんとす危機で
あり、名前を捨てて世界の脅威となった仮面ベルソナの道化だ。クラウン神だろうと
俺は止められない、……その部下如きが俺を止めれると思うなよ。」

「そうですか。」

ドドウン

神の刺客は懷から銃を取り出し彼の顔に二発放ち、それを受けて彼は
うつつ伏せで床に倒れた。

囚われの御姫様 フォー（後書き）

前話で次終わると言っていたのにも関わらず終わらせられませんでした。

何かこのままだと軽く一万字超えそうなんでまた分けることにしました。時間も掛かりそうですし。

次の更新は遅くとも一週間以内にはします。

更新遅くて済みません。

神と彼の奇妙な物語

昔、彼が神と言われる者に出会ったのはまだ9歳になって間もない頃の事だった。

彼はその日にいろんな事を体験しすぎたのだ。

幼きころからの良き友の裏切り、周りの大人の金と生への執着、親との隔絶、そしてそれらの後に彼が慕っていた者の生を目の前で止められたのだ。

神と名乗る者に。

これ等の自称は彼に絶大な影響を与えた。今まで繋ぎ止めていたものがたった数時間足らずでなくなってしまう物だったのだ。その程度の物でしか無かったのだ。人と人との関係なんて。一日過ぎたら忘れる事もあれば何年経つても恨みを抱えていたりすることもある。そんなものだったのかこの世の中なんてと・・・。

神は肉塊から剣を抜き、血を払い、少年を見据えて言った。

「死ぬ前に一言下さい。」

彼に剣を振り上げながら声を掛けた。その質問に少年は鼻で笑って答えた。

「はっ、お前が神なら俺は魔神だ。」

「君みたいなお前がかい？」

神はこの言葉を聞いて少し興味が出て来たので一言目を促した。

「はん、魔神にも、幼少期つてのはあるんだよ。今の俺がそれだ。だがな、後数年してみる。どのゲームの最後を飾るボスなんてめじやねえよ。此处で殺すのはちと時期早々だ。」
神は剣を鞘に収めた。

「ふふつ、そんな時が来るなら確かに嬉しいねえ。うん、そうだね止めておこう。君がこの先どうなるのか『この先も』見てみたくなつた。」

「何？何を言ってる。殺すんじゃないのか？」

「それこそ何を言ってるんだだよ。僕は暇なんだよ。暇だから人に知恵を与えて暇だから欲を与えて暇だから力を与えたんだよ。そのなれの果てが仮りそめの平和になったんだよ。でも、そんなの面白くもないんだよ。動かないものを見てても詰まらないだけさ。だから自分が動いてみたんだけど、人を殺すのも詰まらなかったよ。僕にはいろんな物が一度に見えるんだけど。今日の君はここ一年間で一番面白かった。それに君つてこの子死んでも泣かないんだね？悲しくないの？」

後ろの死体を指差して聞いた。

「……悲しいよ。お前を今直ぐにでも殺してやりたい位には。泣なんて……俺は義務以外では泣けないんだよ。その前に俺に涙腺があるのかももう怪しい位だ。」

もう9歳の発言とは考えにくいが彼はそう言った。

「ふゝん、そんなもんか。まあいいや。じゃあ僕はもう帰るけど君にこの仮面を渡しておくよ。」
神は何処からか黒くて黄色の模様が施された仮面を少年の手に持たせた。

「それは君が後数年になったら付けて、それが君の為になり。僕のためにもなるものなんだ。君が嫌がってももう遅いからね。……いつか僕を殺せるといいね。」

いきなり現れた神はまた突然いなくなった。

辺りにあるのは死体とひそひそと話すゴミだけだった。

何なんだこの仕打ちは。

結局は生かされたのか？あいつの暇を潰すおもちゃになったのか？全てを無くして最後に残ったのはアイツの物だと。

ふざけるなよ！！何だあいつは！！何だこの世は。

何で俺がこんなことをされなくてはならない。

何でこんなにもこの世は不条理で不公平なんだ。

弱者は平然と切り捨て強者はのし上がる。

何でこの世はこんなに醜い。

何故人は人のことを他人だとする。

人なんているのかよ。

要らない。

こんなやつらなら俺は要らない。この世に要らない。

…無に帰してやる。

だが、ただ無に帰しては駄目だ。
それじゃあ面白くない。

下剋上、上下の変化、上の者を下にして下を上げる。
それで拮抗、だがそこに僅かなずれ、ずれからまた格差は生まれる。
それはまた明確になる。これじゃあ駄目だ。

そうだ、全員上は無理だ。……………下を見せてやる。

そして、……………神を殺す。

囚われの御姫様 ザ・ファイナル

世界が泣いている気がした。

世界が壊れる音が響いてくる感じがした。

神の笑い声が聞こえてきた。

神の悲しそうな顔がそこにあった。

人間を見せられた。

人間はよく分からなかった。分かりたくなかったただけだと知っていた。

自分を見た。

とても、とても……い気がする。

天女姫

「ジエイ!!」

彼の体が地につくと共に彼の背後から神の使いに月明かりに怪しげな刃紋が浮かびあがる白い短刀を構えたエレナが飛びかかる。

ギイイイイン

男は手にしていた銃で太刀を受ける。

「…切れない！」

驚くのも無理は無いだろう彼女の持つ短刀『白月』は大抵の者は豆腐の様にスパンと切れる優れものである。

「貴方にそれは少し宝の持ち腐れですね。」

ドン、

彼は余っていた左腕を懐に入れると取り出さずに上着の下から打ち込む、彼女はそれを打たれるギリギリ前に察知して避け、距離を取るとすかさずアーミーナイフを投げる。

「良く鍛えられてる様だな。だが、甘い。」

彼はあるうことか左腕でそれを受けた。尤も右の側は彼女の方に標準を合わせている様だ。

彼女も直撃こそ受けたが幸いにも当たった場所が足だっただけに直ぐにどうこうということでもない。

「良く鍛えられてはいるが、それでもまだ足りない。若いのに惜しいですね……命令なので。」

ドゥッドウツッ！

「ぐうう、き……さま……。」

「うふふはは、貴方も甘いですね。……貴方の私に対する評価は少し低い所にある様だが……残念でしたね。私はまだ死んでませんよ。」男は足と腹を打たれて這いつくばりながら彼を睨みつける。内臓が傷ついたのだろうか。時折に血吐をしている。彼の方も頭が切れた

らしく血が流れている。

それにしても、余程の事がない限り出てくるなと言っておいたのに……ま、仕方がないか。

「お……おま……どう。」

「俺の事は知らんでもいい。それより最後にもう一つだけ教える。神の奴らは何を企んでいる。」

「い……それは……言えない。」

こいつが馬鹿で良かった。……ありがとう。

「約束通り最後にしてやる。……神の使いの堕天使は全員例外なく地獄に堕ちてろ。」

さてと、少しどころではない位時間が滞ってしまったな。

「エレナ、大概の事では出てくるなと言っておいただろ。」

「だ、だって、死んだと……心配される様な事するからでしょ。」

お陰で相手の気がそれたから助かったんでけどな。

「助かったよ。」

「え……。」

「足……見せろ。」

彼女の足に応急処置を施し始める。

「……見事にやられたな。」

「うん……痛っ、手も足も出なかった。」

「負けたらどうする。」

「強くなつてやる。」

お前は加速し続けるタイプだからな。その気があれば強くなれる。

「ふふつ。」

「笑うな!!」

「強くなれよ。俺達は大国を相手にするんだからな。もうこうなったら五右衛門ぐらい強くなっちまえ、その剣だって斬鉄剣なみの威力は有る筈だしな。そうだな、本当にそれ位強くなれよ。アイツは銃弾だって切つてたぜ。」

応急処置も終わった。

そういえば姫さんは何処行った？

光輝と一緒に？

「おい、光輝と姫。」

「お呼びか？」

呼ばれると直ぐに姫と供に姿を現した。

「ああ、呼んだ。もう時間を掛けたくないからな。チートを使わせてもらふ。もう後ろの警備は良いから姫さんとエレナを連れてそこを右に曲がつて付きあたりの左の壁は壊すと道が出来るからそこから外に直で行ける筈だから行ってくれ。無かったら窓壊して行け。」

「了解。」

アイツはすぐ行動するから良いよな。疑問はあるんだろうけど……。神の奴はこんなしたっぱを使つていったいぜんたい何を考えているのか？

彼は死体のポケットを探つて中から携帯電話を出した。

履歴は全て消されてるみたいだな。リダイヤルも無しか。一件の登録も無し。ポケットの中に電話のメモもない。記憶していた可能性は考えられるが……これは相手からの一方的な物だと考えてよさそ

うだな。貰っておこう。

ここは済んだ。次に行くか。

「くそっ!!」

ガキ、ガッ、ガガガガッ

「はっ、はっ、ふう。」

「どうした。若いもんがそんなに直ぐにばてたりして。」

このじじい、……………やっぱり強い。だが、

「これから担うのは若い人達ですよ。貴方にはもう退いてもらいます。」

「先ほどから言葉だけは一人前じゃな。喋らず剣をだせ。」

クロロの体はもうかなりボロボロであるが、爺さんの数個の傷はかすり傷である。

分かってますよ。

やはり彼の言う通り今の私では良くて相打ちか。

いや、それならまだいいが…くっ、らっ、…このままだとそれも出
来ずにやられてしまう。

彼は勝てないようならこの後ろの階段前に誘いだせとのそうだな。

ガッ、ギギン。

良し後退していくことは出来る。

こここの辺りか？

もう後ろには行けないな。少し不味い。

「追い詰められたようじゃな。」

爺さんがそう言うと言った段階の上から声が聞こえて来た。

「それが自らを省みた言葉だとしたら上出来ですがね。」

なんとか間に合ったな。もう決着はついてるものだと思っていたんだが……ここも予定より遅いのか。

「残念ですが、2人とも終わりです。」

彼はマントの内から先ほど大勢の前で見せたボタンの3つついたりモコンを取り出した。

「クロロ氏は見たことありますよね。実はこれ、あながち脅しだけでも限らないものなんですよ。そこ、爆発しますよ。」

ドッ、オオオオッ

「そう、こっちに来てくれないと。」

クロロは彼の方に爺さんは後ろに下がりそれぞれ爆発から逃れた。

そして、爺さんの居る廊下の端から端まで見るからにヤバそうな色

の気体が包み城に空いた穴から外へと出て行つた。

爺さんは苦しそうに又悔しそうに見えた。

「クロロ氏、あの虫の息の人の後の事は貴方に任せます。先に行きますが直ぐに来て下さい。」

「分かりました。有難う御座います。」

クロロはゆっくりゆっくりと爺さんの方に近づいた。

爺さんは蚊の鳴く様な声で話す。

「……どうしたんじゃ……そんな泣きそうな顔をして……。」

「私はずつと貴方を超えたいとは思っていましたが、このような形で戦う様な事は……。」

「ふおっ……ふお、お主は自分の考えを貫こうとしたんじやろうて……。」

ワシの死期はすぐそこじゃが、一つ頼まれてはくれんかの。」

「何ですか？」

「ワシはお主をあの子よりよっぽど孫の様に、……いや、自分の欲に溺れ人の道を踏み誤った息子よりも可愛く思っておったのじゃ。毒などに殺される前にお主の手に掛けてくれんか？それならまだ本望と言える。」

クロロ氏は自分の剣と爺さんを交互に見やっってから答えた。

「はい、分かりました。」

ワシの人生の最後は少し苦しくなってしまったのう。

クロロに殺されるとは思わなんだが、これも若き日のつけか。

クロロ、くれぐれも気をつけるのじゃ。奴はあの時お主も……一緒に

に…ま、…いいか……のう。

後日クロロ氏はここから持ち帰った彼の刀を墓標の前にそつと置いて三十分の長い黙禱を捧げたのだった。

ドシツ、パライインー！！

「痛つてー。」

このままじゃやられる。それに思つてたより大分強いな。

エディが敵に蹴られて一階の窓から外に飛び出した。こちらでも劣勢の様である。

「君はあの強そうなオジサンの代わりとして戦つてるんだからもつと頑張つてくれないかな？それと逃げるのにも相応の力は必要なんだよ。」

確かにアイツの言う通りだ。俺は多分こいつから逃げられない。でも戦つて勝てる相手でもないからな。あーやべ、隊長にかつこいい事言つたけどきついてもうあいつに煽てられて少し調子に乗ってしまった10分前の俺殴りてえ、どっかにタイムマシン落ちてねえかな。つて俺ー！！落ち着けー！！まだやれる、やれる筈だー。

俺はやればできる子だって言われてきただろ。

「いいかな、続きやつても。」

「あ、ちよっと待って。」

「うん。」

ええーいいの。待ってくれるの。

てか、こいつこんなキャラだっけ。仕方ないこうなったら……いきなり攻撃。

「はっ、やつ。」

バシッ、パシイン、ぐいつ、ドッ

一撃目のパンチは弾かれ二撃目を掴まれ手前に引かれて腹に入れた。

「ぐうつ……くつ。」

奇襲にもかかりやしねえ。レベルが違う。レベル10は違うな。それも ケモンの方でドラク なら装備で何とかなるけどポケモ はそんなのないからな。もっとも相性とかはあるけどあいつ武器隠してるし俺素手だからいいとは言えないだろ。俺格闘で相手岩みたいなもんだよ。てか何であれって水の技が炎以外のタイプにも効果抜群だったりするんだ。水浴び出来ねえんだったら全身めちゃうくちや臭いんじゃないか？そこらへんどうなんだろって違うだろ。現実逃避してんじゃねえよ俺。ポケモ 談義はいいよ。R団の隊員の生命カゴキブリ以上とか気にしてる場合じゃねえよ。相手も携帯出して何か始めてるぞ。嘘だろ、何でゲーム始めてんだよ。てか俺一人ごと長いな。村 斬より長いんじゃないね。このネタは皆には厳しいか？もう戦おう。

「行くぞ。」

「あ、セーブ。……………来いや。」

二人が打ち合いに入る直前上から爆発音が起こり、瓦礫が落ちてきた。

この時帽子男はエディから目を切り瓦礫を避けることに神経を注ぐうと考えたが、エディはこの時しか無いと考え、瓦礫を気にせずに敵を思いっきり殴り飛ばした。敵が怯んだ隙に連撃を与えるために近づく時、右肩に大した大きさでは無かったまでも数十メートル上からの物だったので怪我もそれなりだったろう石がぶつかった。それでも彼は怯まずに相手を吹っ飛ばした。相手は窓から再び城の中に行った。

はっ、はっ、お願いだ。もうやられてくれ。

数秒が経った頃だ。

城の中から銃声が聞こえて来た。

エディは新手の敵かと身構えるが、中から出て来たのは彼だった。

「おいおい、お前は甘いな。気絶でほっておく積りだったのか？あいつは俺達を狙っていたのだから此処で殺しておくのは定石だろう。」

「殺したのか？気絶してる奴を。」

「お前は聴力を失ったのか？聞こえただろ。銃声が。敵が来るからもう引き上げるぞ。言いたい事は帰る途中に聞く。」

こいつも左腕もそうだがボロボロだな。…よく全員生きてたよ。ホ

ントに姫を助けるのに良い経験になるだろうと連れてきたが、良かったのかな。

帰りのヘリの中では隊長と彼を除く皆が疲れて眠りについていた。

「ジエイ約束の物だ。それと、地下の奴らは勘が良いのか。俺が行った時にはすでにどこかに消えていた。データも消さずにな。余程急いでいたのかとも思ったが、後で爆発が起こった事を考えると見切りをつけていたんだろう。今頃は新しい場所で研究の準備をしているのだろう。」

「ああ、報告ありがとう。」

「それと、エディの……いや。何もない。」

彼が受け取ったのは小さなチップとCD、封筒を各々数点づつだった。

ふむふむ、ふふふつ、ハハハハハッ

王と研究員を逃したのは惜しいが、本当に割にあう成果だな。

遂にこれで人類の脅威の核に次ぐ戦争兵器を手に入れたぞ。
あの王の動きが怪しいと言われて来て見たが、これ程の物が手に入る
とは、神は俺の敵だが、悪魔は俺の味方ということか。

これで又一步野望に近づいたな。

彼等が帰ってきた所は時差等の関係で日が落ちた頃だった。

取り合えずエレナとエディを手当に出して、クロロとアウロラ姫と
で彼は部屋に連れて行った。

「それで、結論は出ましたか？お姫様。」

「いえ、……まだ……。」

やっぱりか。この人は今まで自分の自己表現なんてしてこなかった
から自由と言っても持て余すだらうな。

「でも、あの……。」

「何ですか？言って下さい。」

「私何でもしますので此処に置いてくれないでしょうか！？お願い
します！……」

これは……吃驚したな。まあ、それでも助かるけどな。

「ええ、良いですよ。貴方には何か考えておきましょう。今日はこの部屋で休んでいてもらいますけど。クロ口氏。」

そして、小声で言う。

「貴方には姫様を養う分に働いてもらいたいのですが？」

「……分かりました。元より貴方には今回借りが出来ましたからね。」

「では、貴方も今日は此処で休んでいてください。私は忙しいでました。」

そう言つて彼は部屋を出た。

「くそつ、あの野郎二発も打ちやがつて。」

彼は医務室で自分に手当をしていた。

「何やつてるんですか？一人でこんな所で。」

「何、と言われましてもですね。ミハネさん。では、一に青春真っ盛りの男子学生さんならにお色気ムンムンの綺麗な女医に会いにきた。二にちよつと眠気が襲つて来たりしてだるいから腹が痛いまたは熱が出たことにして眠りにきた。三は怪我の手当てつてところで

すかね。」

「一ですか。でも、綺麗だなんて言われても私にはもう直ぐ4歳になる子供もいますしだめですよ。」

「あ、そのガーゼ取って下さい。」

突っ込んで良かったのだが、何かそうすると負けな気がしたので綺麗にスルーする

「あれ、突っ込みがまだですが。」

「もう4歳になるんですか？早いものですね。最初は嫌われてましたけど最近ではすっかり懐いてきましたしね。」

突っ込んだら負けだ。俺は負けないぞ。

「そうですね、貴方も今では懐きましたからね。大人の女性に綺麗なんて言えるくらいに。」

「昔は僕もまだ若かったですから。」

「突っ込んでくれないと食事代請求しますよ。」

勝った。

小さく死角になる所でガッツポーズを作った。

「良いですよ。お子さんも大きくなってきましたし。給料どうしよいかと想着ていましたので。俺が一月払ったら足し位にはなるでしょうし。」

「ふふふつ、冗談ですよ。それにしても、一人でこっそりくるなんて貴方らしいですね。」

一瞬ぎくつとさせられた。何とも不覚だ。

「どういうことですか？捻くれてるって事ですか？」

「ふふつ、他人本位ですもんね。」

「……貴方もね。」

これは皮肉だ。この人のこういう所は少し苦手だな。何か普段の調子ならあしらえるのに、シリアスな展開だとちよつと……。

「これでよしです。くれぐれも無茶は止めて下さいね。貴方が皆が自分をどう思ってるか考えて

るのは分かりませんが、…ネガティブなのは外れですよ。」

「ありがとうございます。」

ふう、休めるのは何時間後かな？

彼が動きを止めるのは随分先の事だった。

囚われの御姫様 ザ・ファイナル（後書き）

堂々完結、よかたですー。

設定纏まらない内からスタートした訳ですが何とかいけたって感じですね。

皆のキャラ位置もこの章を書いていく内に勝手に定まった感じですからかなりの見切り発車でした。

途中のシリアスな所をコメディークリックにしたかったのですが止めて良かったと今は思います。

では、今回もこの辺で。

今日の友は明日の敵？

彼は良く空を見上げる。

空は白いからだそうだ。

皆が首を傾げてどうして？と問うが彼は決して語ろうとはしない。

彼は今日も今日とて空を見上げていた。

「起きて下さい。御姫様。」

アウロラ姫は余程疲れていたのか、ヘリの中で仮眠を取り、夜もはように寝静まったにも関わらず彼が6時過ぎに起こすまですっと眠ったままだった。

「あ……えっと……ッ！お早う御座います。」

まだ少し寝ぼけているみたいだな。あの城ではちゃんと徹底されてたんじゃないのか？こつという事も。

「おはよう。ふふつ、突然ですが貴方には今日から学園に通ってもらいます。」

「…学園？…あ、猫。」

彼女は学校という単語に首を傾げ、彼の肩の上に綺麗に乗っている小さな黒猫に興味を持った。

学園？っておいおい。

「学園というのはですね。同じ年頃の人が集まり勉強をしたり時には遊んだりして過ごす場所の事です。何でもする、と仰ったんですから。まずはそこで一般教養を学んで下さい。後、こいつはどこかでトラウマでも持ったのか、あまり人に懐かないんです。リビって言う俺がつけた名前があるんですけどね。メスらしいです。」

「触ってもよろしいですか？」

学園の事を聞いてくれないかな。

「いいですよ。こいつがどうするか知りませんが。」

アウロラはルビに触ろうと手を伸ばしたのだが、猫は反対側の肩の方に移動してしまった。どうやら触らしてくれないらしい。

何度か試してみたが触る事は出来なかった。

「気は済みましたか？済んだのならこの服に着替えてほしいのです
が。」

その恰好で学園に行かせても面白いかも知れないが、制服が原則だからな。いや、いつそのこと一日目なら私服で登校しても規則としては大丈夫ではないだろうか？道徳的に問題ありだが。でもあの学園は譲さん坊ちゃんが多いから大丈夫かもな。

「少し変わった服であるますね。」

「……………これから慣れていけばいいですよ。」
色々だね。

「俺は出てますから着替えたら呼んで下さい。」
彼は部屋から出て合図を待った。

先程報告があつたがデータを見た限りでは完成に一月は掛かるらしいな。逃げた奴らに先を越される前に何とかしておきたいのだが、こればかりはもうどうしようもない。こちらは頭脳派総出で戦闘部隊の人員も出来るだけ使っているからな。逃げた奴らは何やらバツクに大きな物があるらしいし。これからは外交政策も忙しくなっていく。金も必要だ……。資金源に大企業がいるとはいってもあれを動かすには会議で奴らを説得する必要がある。邪魔だが、かといって殺したら殺したで牽制し合っているこの状態では得策ではないだろう。……神の事も頭に入れなくてはな。

それにしてもかなり喜んでたな。頭脳派の連中。
人類未踏の地にしてポストモダンの夢。将又科学者達の集大成とか何とか言つて騒がしかったし。

「ふっ。」

彼は誰もいない廊下で微笑みを漏らした。

コンコン、とドアが二度叩かれ合図を受ける。

そして、彼は顔を引き締めてドアを開けた。

「……ちゃんと着ろよ。」

先が思いやられるな。

「では行ってくるが屋敷の事はちゃんと任せたぞ。光輝。」

「へい、行つてらっしゃい。」

「では、行きましょう。御姫様。」

「ミャー。」

ルビがトコトコについてこようとしている。

「ふふっ、ルビ。君にも俺の留守を頼みたいんだ。分かるかい？」

「ミャー。」

分かったか分かってないのかは知らないがついて行くのを止めた。
本当に良くできた猫である。

そして、実のところ彼は余程忙しい時でない日にはここから通学一時間半程の所のバルトロム学園という所に通っているのだ。

だが、年齢、名前、出身等を偽っており年齢は満たないが彼女と同じ高等部の一年生となっている。

その所は彼女ともしっかりと前もって打ち合わせしており、彼女はアウラという名でセビルア人として行動してもらうのだ。出身はともかくとしてこの学園では人種がポイントとなってくる。

彼が彼女を教員室に連れて行った後彼は大きなため息をついた。

彼女が無知だという事は知っており、覚悟していたが彼の想像を超えるほどであったのだ。

疲れたな。まさかこれ程とはな。あいつを学園に連れてくるのは尚早過ぎたのか？だが、遅かれ早かれ外を知らねばならなかったのだ。一週もすれば落ち着くだろう。

「どけよ！！ルソン人のくせに、自分達の立場をわきまえろ。」
前の方で誰かが騒ぎ始めた。

ルソン人とはこのクライシスの有する国においては前に先住していた者達であり、クライシスという組織の者達の大体を占めるのがセビルア人という事から社会的に下の地位とされており、それは就職にも関わってくる。

彼に取っては床に這いつくばっている者も上から見下ろす者はもつとであるが、兎に角めざわりで仕方がない存在だった。

「何があつたんだい？レミ。」
近くに彼のクラスメートの女の子が立って見ていたので話しかけた。レミは少し小柄で元気な女の子である。

「あ、お早う。エル。それがただぶつかっただけなの。」
彼の偽名はキエルで皆はエルと呼ぶ。

「そうなんだよな。もうこれだからこの学園のセビルア人は物騒だって言われるんだよ。」

後ろからジャンと言うひょうひょうとして丸メガネを掛けた青年も顔を出してきた。

「そうか。」

つかつかとまだ収まる気配のない騒ぎの中心に歩いていく。

「おい、止めとけて。」

「危ないよ。」

「大体でめえ等はな。」

「おい！！こんな目立つところで騒ぎを起こすのは止めてくれないかな。凄く迷惑なんだ。君はもう行っていいよ。」

慌てて覚束ない足取りでふらふらと周りの人より体を低くして駆けて行った。

「お前何勝手に逃がしてんだよ！！」

「逃がしたわけじゃないよ。彼が居るべき場所に戻したのさ。」

挑発的に言葉を返す。

「この野郎……。」

ふふふふつ、今は少し気分が悪いんだ。ストレスは早めに無くしておかないとな。…君にも知ってもらおうとしようか。この世がどういうものかを。

さあ、行くぞ。お前と俺とを接続、

「喧嘩なんて止める。どちらも痛み分けなんてしてもそこに意味なんてないぞ。」

「お前は……ステラ。この偽善者め。」

「ああ、そうだね。でもだからどうしたんだよ。」

「うつせえんだって言ってるんだ！」

男の突然の不意打ちを簡単に交わすと足を掛けて転ばせた。

「止めた方が良いと言ってるんだよ。」

ジャンも持ち前のノリではしゃいではいるが、内心は不安で一杯であり、ステラは温かく見守るばかりである。

「固まってどうしたんだい？レミ。」

彼が固まったままのレミの肩に手を載せた。

すると、「ばかー！！」と言いながら鞆を振り上げてきたのでそれを彼はかわすと鞆の描く円上にいたジャンに見事に当たりレミは走っていつてしまった。

「何で俺だよ。痛いな。」

「それにしても、今日は走って行く人が多いな。」

彼のその呟きにステラは苦笑いを浮かべていた。

……この時は思っていたんだ。一生の親友っていうのはお前のことなんだと、そう信じて疑わなかったよ。

でも、それは違ったんだな。この時この瞬間もここでの思い出は、お前にとっては嘘でしかなかったんだろ。お前にとっては俺なんてただ知ってるというだけの関係なんだろ。

俺はお前にこの時言われた言葉にどれだけ救われたか……。お前という存在にどれだけ感謝したか……。

まさか、俺とお前は一生の親友でなくて一生涯の……敵だったなんて……。

まさか、俺に心のありかを示してくれたお前が、俺の心を否定するなんて…

俺達は出会わない方が良かったのか？なあ、この時の様に教えてくれよ。何でも知ってるんだろ。…キエル（クラウン）。

もう何よ。皆で私のことからかって。それにエルまで。いつもはあんなこと頼んでも言ってくれないのに。別に頼んだことないけど。そんなに面白いのかなー、私のリアクション。

…でも、恥ずかしかった。

まだ、思いたせるもん。手を取って目を見て少し感覚を開けてそれで、

「さっきは悪かったね、レミ。」

そうそうこんな感じの男の子なのに少しハスキーな声で……。

「エル！ー！」

「はい。」

彼は少し驚いたようだが、何ともなかったように返事を返す。

もう、いきなり出てこないでよね。それに周りで笑ってる子達がいって恥ずかしいよ。

「……くくくつ。」

「……何でエルまで笑ってるのかな……？」

「え……それは、あれだ……」
彼がレミの威圧により返答に困っているとタイミングよく予鈴がな
った。

ほっ、そう言えば冗談はほどほどだったな。

「俺は席に戻るよ。」

「……ジャンに答えてもらうからもういいよ。」
レミの隣の席はジャンだったりする。

この学園はクラスによって席が決められていたり、決められてい
なかったり先生によって違ったりしており、机は長机に4人ずつ座っ
ている。移動の教室も多いので余り使わなかったりもする。ちなみ
にステラは隣のクラスである。

ふふっ、ここはいいな。だが、ここは俺の居場所じゃない。楽しい
が何か違う。ずれ……か。

彼は窓の外を眺めていた。
いつも別段大して話をする訳では無いが隣の席の子が話しかけて
来た。

「ねえねえ、キエル君昨日何してた？」
名前は……何だっけ？」

「特に変わったことは何もしてませんよ。家にいました。」

「あれ、人違いかな？昨日お城で見た気がしたのに。」

こいつ……いたのか？くそっ、あそこに来る人達全員にリサーチを掛

けとくべきだったか。じゃああいつがここに来るのは少し不味くないか？…ばれる？どうする？あいつはこのクラスに来るんだぞ。

……「く」。

何焦ってるんだ。不審に思われるぞ。

「どうしたの？」

「いや、…お城とか聞こえたから少し呆氣にとられてね。」

「ふふふつ、良いでしょ。でもね、予定なら今日までだったんだけどね。中止になったみたいなの。良く分からないんだけどね。」

間違いない。あの城だ。一応髪形位は変えさせたが…。

「ふーん、どんなご縁があったのですか？」

「ご縁？お父さんが招待されたんだよ。何でも仕事を一緒にしてるらしくてね。」

…仕事？…裏の方だったら面白いのだがな。でも、こいつは妙にお喋りだな。いや、人間などそんなものか。切っ掛けや口実を見つけてスムーズに2、3言交わせれば次々と口について出るからな。

先生が教室に到着した。

起立と礼を彼が言う。彼は少し休みがちだが、クラスリーダーでもある。（ジャンの推薦）

「特に言つとくことはねえけど、今日は新しい仲間が入るぞ。入つて来て。」

彼女が部屋に入ってから教壇の上に来るまで彼は窓のガラスに映っ

た隣の子の顔を覗いていた。

特に変わった様子もないけど、どう思っているのだろうか？聞いてみるか？

「なかなか綺麗な人ですね。歩き方にもどこか気品が感じられますし。」

「そうだね。それにしてもどこかで見た気がするんだけど？」

「女優とかにいてもおかしくないですね。」

「ふふっ、でもセビリアの人だから違うよね。」

この国の有名人は人数が少ないのである。

「親しみやすい顔、という所ですかね。」

本当に気づいていないといいのだが…。

挨拶を澄ませて歩いてきた彼女は彼の事を全く気にしない様子で通り過ぎた。

彼は自分が話しかけるまで他人になっていると事前に言っているの、でここは問題ない。

「それにしても凄い人気だなー。お前が来た時も結構盛り上がったけど、彼女ほどじゃなかったからなー。」

もう五時限が終わったがまだ周りに人が付いている。

「俺の時はそんなに人もこなかっただろ。」

「あれはお前が話しかけにくかったんだよ。俺も最初は窓の外をずっと見てるすかした奴だって思ってたもん。」

うんうんとレミも頷く。

「でも、視線だけはかなり集めてたぜ。」

一日観察したが、やっぱり気付いてない様子だな。それもそうか。良く見てなければ少し遠くにいたので分かりずらいだろう。目を凝らすなんてまねするのは内の奴ら位だろうしな。

この日この時交わした言葉が巡り巡って彼の身に掛かってくるとは彼にも予想のつかないことだった。

今日の友は明日の敵？（後書き）

危なかった。

何が危なかったって油断してたら学園ラブコメにでもなりそうなのが危なかったです。

それも彼女を使うのが楽しかったのもありますけど…。

何かいいですね。これが終わったら次に書いてみようと思ったか
思わなかったり…。

後、彼がいつ仕事してるの？とか疑問に思つかもですが彼は見てない
所で頑張るタイプなんです。

では、締めまりがないですが、また。

レジスタンスの裏には？

彼はフェアが好きだ。

それ故に時折に敵に塩を送るのだ。

それは傲慢な事なのだろうか？

ウーウン！！ウーウン！！

突如組織内の警報が鳴り、緊急の用事だということが皆の緊張感を高める。

『ジョーカー様、各隊の隊長、副隊長の皆さまは至急会議室にお集まりください。』

夜の皆が食事を終え身を休めていた所であつたので少しの怠情感も高まつた。

会議室には残すところジョーカー一人となり、彼もそんなに経たず

に入ってきて直ぐに話し始めた。

「私は此処に来る前に要件を聞きましたが皆さんは？」
皆まだだと言う。

「手短にいきます。ルソンの方々率いる抵抗勢力レジスタンスの人達が私達の所有する医療施設の周りで騒ぎを起こしており警備の人達では手が回らないそうです。そこで、H隊ハート、C隊クロウバー、D隊の三隊の人達は出撃して下さい。」

光輝の隊はS隊スピードにあたる。

暴徒鎮圧に際して三隊派遣等今までにない事であるので皆は少し困惑気味になった。

「三隊を使う事に意味はある。詳細は移動中に話す。ぐずぐずしていて逃げられては意味が無い。よってこの会議は終了だ。」

一方的に話され一方的に終わらされるという傲慢な態度に怪訝な顔を見せるがそれでも行動に移るのは早く、会議室は瞬く間に静まり返った。

車での移動中に彼は無線で話し始めた。

『今回の暴徒は今までの者達とは違い一応の武装を整えてきているそうだ。そこでこの者達の背後に僅かだが資金の元がある感じもある。だが、一番の理由は見せしめだ。レジスタンスの人には残念ですが、消えてもらいます。なお、そのさいに逃げ出す者が居れば一先ず左右と上は良く確認しながら追って下さい。では、C隊は前からD、H隊は左右から攻めて後ろは空けといて下さい。恐らく貴方達の姿を見たら下がってくれるでしょう。』

さあ、どう来るかな？暴徒の諸君。

そして、いつ抵抗は反乱に変わるのかな？

それとも、いつそ屈伏してくれると俺としてはありがたいのだがな。そうしてくれるとこちら側も待遇を出来るだけ考えてもいいものを…。

だが、どうせやるのなら最後までやりきって欲しい気もするけどね。

数分後にアレク隊長から通信が入った。

『J、敵隊は我々を見ると直ぐに全員左側に待機しているD隊の方に向かった。』

『お前達は相手がお前達が常に追ってきていると分かる様な位置にいるなり、アピールをするなりしておき、D隊とC隊の中間点に向かう人も数人作って下さい。』

『分かった。』

「……ふう。」

通信がきれるとアレク隊長は大きく一息ついた。

「……隊長、あいつは、Jは何考えてるんですかね？最近細かい指示が多くないですか？」

エディは隊長の顔色を見ながら言う。

隊長はエディの顔を一瞥した。

「……分らん。だが、結果があるからな。」
その現状では余り意見が出来ないのだ。

彼は直ぐにD隊と連絡を取った。

『2分後程の俺の合図で前方のビルや建物を崩せ。やり方は問わない。』

『ハイ、分かりました。』

H隊にも連絡を入れる。

『少数班とその援護に分ける。少数班は先ほど話した後方の待機ポイントに急げ。残りの者はC班と連絡を取りつつ包囲網をせばめていけ。援護に向かう用意も怠るな。』

『了解しました。』

「では、6、7、9は先ほど話したポイントへ、気を付けろよ。後の者はC班との幅を詰めるのだ。」

三人は直ぐに動いて行った。

「スタンリー隊長、三人で大丈夫でしょうか？」

隊員の一人が心配そうに言った。

「……心配するな。我々にはあのお方が付いているのだぞ。従っていれば問題が出て万事解決だ。」

H隊の隊長は少しJを神聖視している所があるのだ。

それというのも、彼はこの隊でも数少ないルソン人の隊員であり、この組織内は多くがセビルア人と言ってもセビルア人は国籍がそうというだけで一時期解放的な事もあり他国籍な面があるのだ。ルソン人は髪質の特徴や赤茶けた肌色、澄んだブルーの瞳など目立った特徴があるため見分けがつく。

当時既に組織内において母国の民と戦いもして実績も上げたが、扱いは悪い上に周りから奇異の目でみられる事もしばしばだった。

そんな時に彼から声が掛かったのだ。

彼が来た後軍の人数も増えナンバーを与えられるのは厳しいという状況の中で声が掛かったのだ。

「君は人種を除けばそここの実績はあるようだから、空き番になった6に入ってもらうよ。」

嬉しかった。彼は歓喜したのだ。ここに来て一番の喜びかもしれない。彼も人間だ。独りで生きることには虚無感を感じていた。必要とされないという感情は苦痛を与えた。だが、認められたのだ。実績は確かにあるのだが、Jの狙いはマスコットの役割が大きかったが、彼はそんな事は知らない。

そして、この後の言葉を聞いて一生仕える事を決めたのだった。

「分かるかい。君を、ルソンの人間を登用する事の意味が……。皆は困惑気味だったよ。まだ納得していない人もいる。……だからヘマをしないでもらいたい。勿論信用はしている。だが、俺を切り捨てる用意も向こうにはあるんだ。」

簡単に言おうか。お前が俺の申し出を受けるなら、言わば君と俺は運命を共にするということだ。お前の失敗は俺の失態として向こうは攻めるだろう今の感じだと恐らく切られる。そして、俺がここを止めさせられたらお前はもうどうなると思う。現状は今より悪くなるだろうね。

イエスカノーの二択でいい。シンプルなのが良。出来れば比喻を使って答えるのは止めてもらいたい。」

スタンリーは二つ返事でそれを承諾した。

「ははっ、お前はいつか後悔するね。俺についた不幸を、俺と出会った運命を……。」

そうした経緯があつたりして今では隊長位である。

彼が隊長になる少し前辺りからの事だが、隊に特色が出始めたのだ。具体的にはH隊が潜入や追跡といったぐあいだ。そして今ではH隊は少し独立した部隊だつたりもする。

「くそつ、ヤバいぞ。後ろからずっと追つてきてやがる。」

レジスタンスの一人が時折後ろから聞こえる銃声に焦って打ち返して言った。

「ああ、分かつてる。でも、相手は慎重にきてるみたいだから大丈夫だと思つぞ。」

「でも、相手も大した事無いのかもね。私達みたいな武器持つて少し訓練積んだだけの相手にこの様じゃしれてるか。フランクは当たらないのに発砲しないでよ。」

一人の子が皮肉めいて言う。

「まあ、そうは言つてもな、ラト。相手は軍隊だぞ。」

「オルターさんは少し考え過ぎだつて、あんな奴らなんか……」

ドッゴーッーン!!

話しながら走っていると数十メートルは先であつたが、凄まじい音と共にビルが全壊し、残骸が直ぐ近くに降ってくる。

「ど…どうすんだよ。やべえんじゃねえか？これ？後ろからも来るしオルターさん！！これじゃあ何処行っても…」

「く、えつと……。」

「左か右かどうするの。それとも後ろを突破する？」
全員の顔がオルターの方に向けられる。

「じゃあ……ひ」

『右だ！！』

突然オルターが持っていた無線機から声が出る。が、誰もが焦りを感じていたこともあって皆がそれを彼の指示だとして、右に向かって走りだす。

「オルターさん、後ろから敵が姿を見せました。」

「あ、ああそうか。」

そして、又オルターの無線から声がし出した。

『取り合えず質問に答えて下さい。そんなに疑問に思っても答えて問題はないことだと思います。貴方が皆を纏めていて指示の通せる人物なんですね？』

「……………ああ。」

さつきと違って今度は小さな声量であり、オルターは疑問には思っていたが無線の周波を知っている程の者なら大丈夫では？と思い正直に答える。

『今からアドバイスをしますが、聞きいれていただいても流してもらっても構いません。まず、このままだといずれ追い付かれて全滅します。』

思わず無線機を落としそうになった。それというのも、少し前に頭の中に全員の死ぬ姿を想像しており、その光景が再び浮かんだからである。

『そこで、生存確率を上げるために二班に分けましょう。一般は軽い武器以外は捨てるかももう一方の班に渡して全力で前を駆けます。幸い敵は前にはいないようなので逃げられるでしょう。もう一方の班には貰って強化した武装で後方に備える。』

彼はこれが囫を作る作戦だとわかり、苦い顔をする。

「だ…だが、それは。」

『無論これは犠牲が出る。だが、むざむざと死ぬ訳でもない。前方をいく人達は近くにあるであろう拠点についたら足に乗って遠くに行って下さい。そこも直に危なくなる。後方の者はその拠点まで下がってきたらまだ勝機もできるかも知れません。武装もセビルアの奴らと変わらなくなるでしょう。では、生きていられたらまた。』
通信は途絶える。

オルターは顔を歪めて考え出す。この結論を手間取つてもいけないという焦りや、受けてはいけないという考え、全滅という言葉の重圧、囫という作戦の重さ、どんどんと深みにはまっていったが、

「…オルターさん。やりましょう。」

近くで聞いていた者が言つて、オルターの返事を待たずに彼は皆に聞いた事を指示として説明した。

皆悔しそうな言葉になって、辛そうな表情になる。

それでも、数人の者が顔を見合わせると表情を力強いものに変えようと囫を買って出た。

この作戦の一つの肝は囫となるものが居るかでもあり、無線を掛けた相手も直ぐには決まらないだろうと考えていた。この作戦は囫を早く作ればそれだけ生存率は上がるのである。

オルターも囫になろうとしたが、それはこの場では許されなかった。

囷の者の一人には妻子を持つものがおり、首飾りを外して届けてくれとオルターの手に掴ませた。

他の者もしつかりと挨拶を交わしていよいよ作戦は実行された。

『J、敵兵が前と後ろの二つに別れたがどうする？』

『後方を見てるだけでいい。お前達は前方を考えるな。後、誰でもいいから車を3台回収しておけ。』

……忙しいな。それにしてもこんなにも決断が速いとはな。少し予想外だったぞ。

『H隊お前達は横にそれて後方の隊を追う形になれ。拠点らしき所に敵が入ったら知らせろ。』

『…ハイ。』

ふふつ、ふふふふつ、彼は司令室で悪党笑いを浮かべて、右手の無線と左手の無線を上に掲げたりして手遊びを شدした。

これで奴らにも生きるチャンスは与えた。後はチャンスを生かすも殺すもお前等しだいだ。

経験の少ない愚か者共が、経験豊富で武装も上のあいつらと戦ってどうなるか、……みものかな？

まあ、相手が何を基準として勝利と呼ぶかは分からないんだけど……。もしも生き残る事がそれなら相手にも十分勝機はあるかもしれない。

な。

でも相手は余り考え事をしないタイプらしいな。

それにしても何のためにこんなことをしたんだ？……調べさせるか。

それはさておいて、負けでも勝ちでも生き残ってもらわないと少し困るのだがね。

レジスタンスの裏には？（後書き）

少し更新が滞ってしまいましたね。

さて、少し戦争っぽくなりましたかねえ。

これからを期待して欲しいです。自分的にはまだ序章ですから。

キャラ見せが終わってからが本編かな？

まだまだ一杯後続が控えていますし……以上で報告終わります。

自作自演と手駒

「J、相手が少し大きな倉庫のような建物に入って行きました。」
やはり相手は馬鹿か。こいつ等のやってるのは唯のゲームだ。不良と変わらん。否、武器を持ってる分達が悪いか。

……仕方がない奴等だな。

「見張りはどうだ？」
間髪いれずに返答がくる。

「上に窓が二つあり、そこにそれぞれ二人と入口の前に一人、中に恐らく2人です。」

「大きめの車が入っているとしたら多めに考えてどれぐらいの数になりそうだ。」

「……？多くて5台位ですかね。出てくるとしたら左側にあるシャッターからになりそうですね。ですけど。」

「君らはそこに待機して、援護を呼んでくれ。その間に足を使って逃げようとしたら止めておけ。」

そこで通信を切った。

配置は三か所、総数はそんなにいないだろうに、見張りは7人。素人もいるかもだな。……それと中に民間人もいるかもしれないな。
……よし、それで行こう。

「な、…なあ？」

隣に座っているエレナが声を掛けてきた。

「なんだ？」

「今…いつたい何処に向かつてるんだよ？」

今、彼女と彼女は現在進行形で車を使い移動中であり、彼女が彼の指示で運転している状態だ。

「レジスタンスの所だ。否、正確にはレジスタンスが向かう所だ。後、面白いものも見れるぞ。」

彼は平然と言ってしまうが、彼女にはハンドル操作を誤りかける程に動揺が走った。

「え…っと…どう、して？」

「…そうだな、お前には話しておくか。全てではないが、まあ大体は。」

そしてアレクに通信を入れた。

『隊長、…後方の人達はもういりません。…消して下さい。』

『…ああ。まかせておけ。』

次だな。

『援護の者はまだか？……そうか、では合流と同時に中に入れ。恐らく中に数十の民間人がある。抵抗するものは打ち殺せ。だが、なるべく捕まえろ。隅にでも固めておいておけ。では頼んだぞ。』

ふう、疲れるな。でも次で最後だ。

「レジスタンスの方々、先の者だ。先ほどは僅かでも信頼の程、どうも有難う。」

『…君か。今、僕らはこれから君の言うように移動する所だ。』

「ああ、そうでしたか。その件について今良い事、否悪い事です。分かりましたので。此処はもう一つ信用して話を聞いてもらえないでしょうか？」

向こうの方がざわついてるのが、通信機越しでも十分に伝わってきた。

そして音が止む。

『一応聞くだけなら聞いてみよう。それでも良いかい。』

「ええ、構いません。それにしても向こうも中々やるみたいですね。どうやらその外で待ちかまえているらしいですよ。今出て行けば全員捕まります。」

向こうがまた騒がしくなる。

『くっそー、やっぱり畏だっただよー！』 『俺は最初から怪しいと思ってたんだよ。』 『お前等がいらん事するから俺達まで巻き込まれたんだぞ。』 『あんなやつの事聞くんじゃないかった』

やはり関係の無い人もいたのか。それも賛成でない者。否、そうじゃないかこういう奴は成功すれば喜び失敗すれば避難する、一般の模倣のような態度だな。これで俺の考えは台無しか。言う手順を間違ったか？そんなこともないか。どのみちこれは言わなければならぬことだったのだ。聞けば騒いだらうからな。電話が難しいってのが良く分かったよ。

『…これから、俺らはどうしたらいいんだ。』
とても弱い声で聞いた。

自分で考えると言いたい所だがそれでは駄作しか思い浮かばんだろう。ふ、任せておけ。

「この作戦、又私に対する賛成、反対は大いに結構。しかし、現状は従っておくのが吉では？そして、この作戦には人数制限があるので生き残りたい者だけを募って下さい。時間がないので一分後に連

絡めますのでその時まで。』

「待機って言われてもやっぱり暇だね。」

敵を追ってきたのはいいもののその後は手持ち無沙汰になっていた。
「黙ってみはつとけよ。敵が出て来たらどうすんだ。レイを見習ってみる。ちよつとは見習え。」

ずっと人形のように固まっている完璧な態度にここまでしなくてもいいと思い言い直した。そして、本人は意識していないが、暇を感じていたのだろう。黙っているとは言ったが、いつもより饒舌になっているのだ。

「もうフラップは固いのよ。それにしても」は本当に人使い荒過ぎ。

「何だ。お前は反対派なのか？」

数年経った今でも彼を悪く思う者もまだ残っているのだ。

「べつつにー、私はこの隊好きだしね。基本的に餓鬼は嫌いだけど。彼はそんな感じじゃないし。」

（お前自分の事分かってたってんのか？それとも同族嫌悪とかか？）

ドッバーーン

「何だ！！」

彼らが会話に興じていると突然、倉庫の壁を突き破ってトラックが飛び出した。

ドシュッ、

だが、レイは冷静にタイヤの片側を二輪打ち抜き転倒して止まった。
「今ので居場所がしれたかもしれない、移動するぞ。」

流石と言うべきか判断も早い。直ぐに切り替えが出来るのも素人との相違か。三人はすぐさま離れた。すると、数秒後に元居た場所で爆発が起きた。

「危なかった。あ、車がまた出たよ。」

十数秒後に出て来た車の運転手を三人で射殺する。ハンドルを切らない車は壁にぶつかって変形して止まる。

「今度は逃がさんぞ。」

三人の左から銃弾が飛んでくる。咄嗟に横に逃げたがそれでも全部は交わしきれず、一番左の位置にいたフラップは四肢に受けた。幸い右手と左足は動かせたので壁の死角に入った。

そこからは暫くの間敵との睨み合いが続いたがそれにも時間が来た。
『雷汞設置したぞ。』

よし、中々の手際だな。それにしても、良くそんなものがあつたな。まあ、驚きはしないが…。

「では、3人を残して退去だ。三人は徐所に下がり、相手の増援部隊が来たら地下に潜り西に進め。分からなければ水か風の流れてくる方だ。煙でも出せば分かるだろ。」

三人を残して他の者は変形した車を拾って去って行った。

「……よし！！デトネーション。」
彼の合図で爆発が起きた。

ふう、どうなったかな。こちらから聞くのはおかしいから連絡を待つしか無いのだが…、

『報告があります。』

来たか。

「何だ。」

『レジスタンスと抗争があり、隊員三名が重傷を負いました。又、レジスタンスを一部逃がしましたが、大多数を確保しました。』

…どういうことだ。爆発の規模がそこまで広くなかったということか？ちょうどこいつらの駆けつけてくる頃合いだった筈だが…現場を見ないことには何とも言えないな。下手な聞き方をする訳にもいかんし。

「車を三台手配させている。それに乗せてくれ。」

『分かりました』

三名…か。もつと重傷者が出ると思ってたが、ふう、中々得てして万事がうまく行くものではないな。

エレナとJはレジスタンスと交戦していた場所から車で20分程の所でまだ車を走らせている。

窓の外の光景は大分変って来ていた。

「面白い光景だろう。いろんな事を考えさせられる。」

一言で表すなら、スラムである。兎に角荒れていた。そして、ここら一帯にすむ人の全てがルソン人という訳でもないのだ。この町は社会の不成功者で構成されている。この国はかなり国境が緩くなっている。なので簡単に入ってくる。そして、金を稼ごうと都市部へ行き、そこで長時間労働低賃金を強いられ、潰れた先はこの町だ。この町の人数は今も増え続けているのだ。

ふと、横にいるエレナに視線をやると、少しぼんやりとしていた。

ふ、懐かしさでも感じているのか？お前の親と逃げていた頃にこういう風景を何度も見ていただろうからな。

世界を探せばこんな町、ここより酷い町等数多くあるだろう。ふふふ、こいつ等のはっぱを掛けても碌に動きはしないからな。…だから決めた、上を変えると……ふう、少し考え過ぎたな。

これからまだ一仕事あるんだから、冷静にならなきゃな。

「お前はここで待っている。」

二人はあれからさらに20分程車を走らせ、港に来ていた。もう一度連絡を取り、今度は落ち合う約束をしたのだ。

そして、フード付きのロングコートを着てフードを目いっぱい被って、倉庫の中に入って行った。

中では既に皆がきていた。少し遠回りをしてきたのでおかしくはない。

まず、彼が中に入ると頭蓋に銃口を当てられた。

「何者だ。」

威勢の良さそうな女性が言った。

「この様な場所に明確な目的も無しに来る人等滅多にいないと思うのですが？」

彼は銃口を当てられても至って冷静である。

「じゃあ、君なのか？俺たちに指示を出したのは。」

「ああ、私だ。」

ここでこの場にいたレジスタンス9名はざわついた。

この中の者は彼の事を大概信用はしているが、批判の気で一杯であった。

それもそうだ。作戦に犠牲は付きものだが、彼の場合は犠牲のある

作戦を二度も使ったからである。

だが、声事態は上がらない。上げれない。彼の作戦に乗ったのは紛れもなくここに居る者全員だからである。

「質問してもいいかな？」

「どうぞ？」

リーダーのオルターがそう言うのと皆の眼が彼へと注がれ、銃口が外れた。

「君は一体どこのだれなのかな？」

最もな質問ではあるが、顔を隠して入ってきたものにこの質問も少しナンセンスではある。

「少なくとも生まれも育ちもこの辺りではない。しかし、この国に怒りを感じているのは私も同じだ。時に問うが、君達は何故今回この様な為にならないことをしたのだ。」

「それは、……」

「俺達に資金をくれてた奴に言われたんだよ！！」
隣で少し激昂気味にフランコが言った。

「君達は真意が分かっているけど且今回の件に望んだのか？」

「ああ、…切られたんだろ。」

「ええ、そうだったのか！！あいつ等！。」

フランコの怒りは上がった様だ。

成る程な。それで不良品な爆弾のわけか。それにしても、バックが消えた後だったか。新たに作るしか無いな。

「行動の理由は分かったが質問の答えとしては不十分だな。何故、この様な事をした。」

誰も答えない。

そして彼は中央へと歩んで行く。

「気付いていないのか？貴方達のやっていることは悪戯に過ぎないということが。」

「何が言いたいのかよ！！」

銃をつきつけたラトが叫んだ。

「貴方達が今のまま幾等行動を起こそうと国は潰れない。変わる事はない。痛くも痒くもないからな。どうせ行動を起こすのならもつと大それたことをなせ、偉業をなせ、歴史に刻め。貴様らのやるべきことは暴動ではない。ましてや抵抗活動でも無い。国を潰すことだ。」

彼の物言いに一瞬たじろいだ。いや、畏怖や感嘆の様な形容しがたい圧迫感に気をされたのだ。

馬鹿にしようと笑い声を出そうとしたが、乾いた声しか出てこない。

「はっ、はっ、んなことできるわけねえだろ！！」

「口だけならなんとも言えるわね。」

「そうだ、何とでも言える。では、何故言わない。それはもうお前達の中で諦めを感じているからだ。何故諦める？まだ貴方達は何もしていないだろう。そして、俺もまだ何もなせてはいない。そこで貴方達の力を借りたい。手始めに貴方達の仲間を助けるために。」

この国が変わり始めた。

自作自演と手駒（後書き）

ひっさびさの更新や！。

これからは最低でも二週更新位にはしておこうと思います。

でも、大変っす。一度書きだすと5000字位あ、なんすけどな。

なんて思ったり、思わなかったり、では、又。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6746d/>

俺の哀れで滑稽な楽しい日々

2010年10月23日14時13分発行